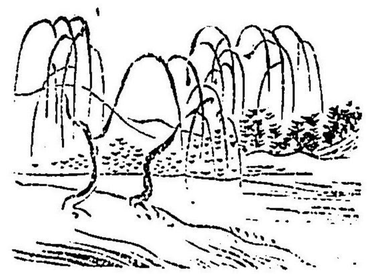
り萬事に親切にして萬事に行屆き旅にありても家に居ると同じ思ひあらしむは茜屋の特色として世に紹介したきことなり、（市内旅人宿規約の宿料は一泊金四十錢以上金七十五錢以下）、

五月雨をあつめて
早し最上川

閑かさや岩にしみ入
蟬の聲



陸前國

○仙　臺

仙臺は東北第一の大都會にして市街繁華さすがは昔し伊達氏の居城ありし所と思はる第二師團あり控訴院あり高等學校あり商業繁昌物貨輻湊せり、東京上野より汽車にて朝の六時に發せば夕の六時に達すべく賃金三等にて金二圓八十一錢とす、

名所舊跡の見るべきもの多く青葉城址は伊達政宗の築きし所にして地は要害に據り城後に青葉山あり今は第二師團の營所たり、瑞鳳寺は經ヶ峰にあり伊達家の墓地にして老樹森々として茂る、林子平の墓は龍雲院境内にあり墓碑は六無齋友直之墓の七字を刻し靈を弔ふ者多く香煙常に絶へず、躑躅ヶ岡は櫻樹多く松楓もあり春秋の景頗

る美にして當地第一の勝地なるべし古は杜鵑花を見しといふも今は
なし、躑躅岡公園は市の西にあり梅樹林をなし風景好し境内廣くし
て遊人跡を絶たず、　支倉六右衛門の墓は北山なる光明寺境内にあ
り、宮城野は南目村の南數里の間なる平野をいふ女郎花、桔梗、萩、
藤袴、刈萱等の草花ありて古より名高し、尚此の地の近くに多賀城
址、十符の池、野田玉川、末の松山等の古跡を尋ね見るも快なるべし、
地の産物多けれども特に名産として數ふへきは仙臺平、埋木細工、
八ッ橋織、水筆、つゝら等なり、
旅館は針久安藤大泉等重なるものとす針久は有名なる旅館にして客
室器具の清潔なるは申すに及はず料理法の如きも頗る注意して都人
の口に適ふやうにする處中々行屆けり何から何まて懇切鄭重なるは
針久の特色といふへし、停車場より針久本店まで約十町車賃壹間

金八錢夜間金十錢とす宿泊料は一泊金五十錢以上金一圓五十錢まで
尚客の好みに應して何にても調進すへく又特別の取扱法もあり、（支
店は停車場の前にあり）、

宮城野

小萩原まだ花咲かぬ宮城野の
鹿やこよひの月になくらん

○松島

松島は牡鹿郡の東北に位せり灣内數百の大小島嶼點在して日本三景
の一たり古人の松島を記したるもの多く今その二三を擧くれば櫻田
皷嶽の松島遊記に、
凡そ東海は何れの處も浪あらく潮汐はげしくして日和よく風靜な
るときも浪聲耳に喧し只此の松島の島嶼をさゝへたる故に絶へて

浪なく海面平にして鏡の如く碧綠澄徹して面をうつし見るへし其中に數千の島々あらはれて三千の宮女粧を凝して宮房に列する如く盡も及ばさるところあり此の島松島もて名づけて殊に松樹多しその松根を岩根によせ枝幹は海底に撓ませられて屈曲偃蹇したるさま臥すか如く倒るゝ如く其海面に俯したるは龍蛇の水に入るかと疑ふ其の樣筆の及ふへき所にあらず、

作並清亮また記して曰く

松島は嚴島天の橋立と相並ひ三景と稱す中に天然奇絕四時に隨ひ朝夕にかはりて極ることなく區域廣大にして日をふれともわかざるは誠に松島を無雙とす松島といふは總名にて其内に數多の勝地あり世に八百八島ありといふは大小の島嶼數多きをいふなるへし松島村に屬して名ある島三十五あり其餘他村に屬して松島の海面

にある島嶼碁局に石を並へたる如くいづれも爭ひて奇狀を呈す中に名高きは雄島なり島々何れも天造の自然に出で前後のながめさまざまの形をなし棹をすゝめ柁をめぐらすに隨ひ千態萬狀かぞへ盡しがたければ里人といへともあまねく其名を知らざるものありされば姿を以ていはゞ八百八島といふもおろかなり、

芭蕉翁の奥の細道に

抑もことふりにたれとも松島は扶桑第一の好風にして凡洞庭西湖を耻かしむ東南より海を入りて江の中三里浙江の潮をたたふ、島々のかずを盡して欹つものは天を指しふすものは波に匍匐しあるものは二重にかたより三重にたゝみて左にわかれ右につらなる負ふあり抱けるあり兒孫愛するが如し松の綠こまやかに枝葉潮風に吹きたはめて屈曲おのづからためたるが如し其氣色窅然として美

人の顔を粧ふちはや振神世のむかし大山すみのなせるはざにや造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん、

島の名あるものを擧くれは兎島、內裏島、茶臼島、辨天島、二王島、蟾蜍島、桂島、鎧島、宰相島、兜島、後島、笠島、野々島、布袋島等ありて一々記するに堪へず、觀瀾亭は觀月崎にありて瑞岩寺の南に位す政宗遊息の處たり傳へ云ふ豐太閤より受けたる伏見殿を移して建てたるものなり、と亭上觀瀾亭及雨奇晴好の二扁額を掲く、瑞岩寺は青龍山瑞岩圓福寺と稱し山城國花園妙心寺の末流にして臨濟宗なり當寺三十二世眞壁平四郎出家して入唐し歸朝の後雲居禪師の德化により七堂甍改り金壁輪奐の美を極む其間數間に分る奥の間、上段、中段、孔雀の間、文王の間、菊の間、櫻の間、墨繪の間、鷹の間是れなり庭前に八房の梅あり左傍に法身窟あり竪四間二尺横一

尺五寸なり左方に陽明院あり右方に天麟、圓通の二院あり伊達氏の廟とす、五大堂は松島の海濱にある小島內にあり大同二年阪上田村麿東夷征伐の時建立せしもの政宗紀州の工鶴左衛門に命して修造せしめたり此の地と天童庵の間に二橋あり民部卿忠敎の歌に「ふみわけて渡りもあらず紫の藤吹きかゝる松島の橋」とは此の橋のことなりといふ、雄島は竹浦の東南にあり日本武尊の東征に際し此の島に立ち寄られたるを以て御島と呼ぶと傳ふと又一說には見佛上人此に住みしに法德高く鳥羽天皇の叡聞に達し佛像を下賜せられしかが御島と稱ふともいへり山上には古松森々として茂り幽靜を極む島中、松吟庵、見佛堂、坐禪堂等あり、富山は松島村字手樽にあり右に相馬の諸峰を望み左に金華山、日和山、石卷を見るへく眞に松島の風光一眸の中に集る山巓に大悲閣あり大同年間阪上田村麿の建つる所

といふ、釋南山の詩に、

松州與盡未云歸、　更上富山俯翠微、　列嶂蒼茫籠宿霧、　春潮蕩漾溢朝暉、
數帆按影霞間出、　群島如鹿鏡裡清、　飛也無人踏東海、　臨風絕頂振征衣、

松島に遊ふ者は鹽釜神社を見るべし社は鹽釜町の北方なる丘上にあり慶長二年政宗の建立に係り武甕槌命經津主命を祀る宮殿結搆莊嚴にして東北第一と稱せらる、外に新富士、三交松、扇谷、大高森見るべきもの多し、

松島の名産として數へらるゝものは實竹、及、魚類にして殊に鰍、鰻の如きは他地方へ輸出盛なり蠣灰の製造も盛なり、

東京より往かんには上野より汽車〃乘り松島停車場（三等賃金二圓九十九錢）にて車を下るへし五大堂にある鈴木旅館までは里程三十町人力車の便によれば賃金十錢とす、又鹽釜町までは海路二里半船

賃一名より三名まて金四十錢とす鈴木旅館は眺望絕佳の位地を占め樓上よりは松島の風景一目に見ゆ殊に日の出月の出は實に壯觀を極む專有の海水浴ありて保養に供へ小船を浮べて回覽の便あり宿料は一泊上金壹圓下金五十錢とす、

・天下有山水、　各擅一方美、　衆美歸松州、　天下無山水、　南山　道人

○菖蒲田海水浴

菖蒲田海水浴は宮城郡七ヶ濱村にあり鹽釜停車場より一里半にして、至るべし人力車通す車賃金三十五錢位、眺望崎は其名の如く眺望に富める所にして政宗此の地に至り名づけたりといふ松島も見へ金華山も見へ渺茫たる大平洋も見るべく且交通の便もよし、仙臺より赴くには岩切にて日本鐵道の幹線に分れて鹽釜に至りそれより菖蒲田へ向ふべし、旅館は大東館、宮城館あり魚肉は新なり仙臺も近かけ

れは何一ッ不自由を感することなし只海水の餘ゝ安穩ならぬは惜むべし、

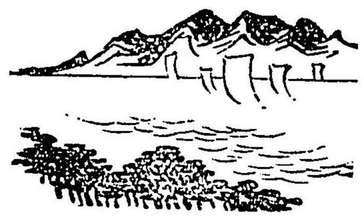
○作並溫泉

宮城郡作並にあり仙臺市を距る西方七里餘温泉は古湯、新湯の二ッに分れ泉質は鹽類泉に屬し脚氣、僂麻質斯、創傷、子宮病に特効あり温泉の開けたること古くして且風景好く浴客常に絶へず、温泉宿は岩松館を重なるものとし紳士の宿泊にも適すへし木賃の方法あり浴費は概して廉なり、

○青根溫泉

柴田郡川崎村にあり大河原停車場を距る七里餘昔し仙臺侯屢々入浴に來られければ一の館を建て青葉の御所と稱したり泉質は鹽類泉にして僂麻質斯、痛風、神經病、脚氣、皮膚病、創傷等に効あり、大

湯は二個の桶より落ち來り浴槽の廣きこと泉量の多きこと珍しき程なり、温泉宿は不忘閣、翠嶂館を重なるものとす宿料は金四十錢金五十錢金七十錢の三等に分るまた宿屋によりて自賄の方法もありといふ、



陸中國

○五串の瀧

五串の瀧は東磐井郡嚴美村にあり一の關停車場を距る西三里、瀧は二層となりて落つ上なるを雄瀧といひ下なるを雌瀧といふ、掛川藩士松崎復の記せる文を石に刻して存す川田甕江瀧の景を寫すこと詳なり左に、

食頃にして五串溪に抵る即ち磐井川の上流にして其源須川岳に出づ衆澗を聚めて東注し漸く東して漸く大此に至り一峽の蹙むる所と爲り雷轟雹激力堅石を劈き懸りて瀑布と爲り碎けて跳珠となり散して飛雨となり滙りて深潭となり盤旋洄洑崖と曲折し兩崖欹欹雜樹怪巖と相彌縫す其聳へ起る處架するに飛橋を以てす下流に盤

石あり大さ數十人を坐すべし清泉淙々として小石錯落す、

夏時杖を曳ひて遊はゞ凉風一陣暑を忘るべし、

五串の瀧を見ば近くの舊跡を探るべし、芭蕉翁曾て此の地に遊び記して曰く、

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり秀衡が跡は田野になりて金龍山のみ形を殘す先高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河なり衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落ち入る康衡が舊跡は衣ケ關を隔てゝ南部口をさし堅め夷をふせくとみえたり偖ても義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる國破れて山河あり城春にして草青みたりと笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ、

夏草や兵どもが夢のあと

○盛岡

盛岡は南部家居城ありし地にして今は岩手縣廳の所在地なり南部富士の稱ある岩手山は屹然として北に聳へ中津川は市の中央を流れ北上川其東を流る仙臺以北の大都會にして市街般賑なり、

地の名勝として數ふべきものは櫻山神社なるべし南部家世々の墳墓なり地は高燥にして全市一目の下に見へ櫻桃其他の草木生い茂り風景に富めること盛岡に於て第一なるべし、公園地は中津川の北岸にし殆んど市の中央に位す戊辰殉難者の靈を祀る園內櫻梅等ありて花時の風景好し、石割櫻は縣廳の隣り裁判所の搆內にあり巨石の上に櫻樹の生ぜるもの樹は其まはり五六尺もあるべく花時蕾を破るや石上さながら白雲のたなびく如く誠に奇觀なり、厨川柵は昔し安部貞任の據りし所にして市を距ること十町、其他、片葉の葦、五百羅漢、

八幡神社等見るべきもの多し、

市を距る六里網張溫泉あり人力車通ず境幽靜にして物價低廉近時好避暑地として漸く世に知らるゝに至れり、

旅館の重なる者は高與（中村與助）、陸奥館とす高與は六日町にあり客室清潔取扱丁寧主人の質朴にして溢るゝが如き親切には一夜の客も忘るゝ能はざる所なるべし宿料は一泊金五十錢より金一圓まで但し特別は金二圓以上とす、

名產として世に知らるゝものは馬、牛、南部釜、南部紬、林檎、草履表、片栗等とす

思へともいはての山に年かへて
くちやはてなん谷の埋木

陸奥國

○青森

青森は青森灣に臨み海を隔てゝ函館と對するを以て自ら物貨湊合し旅客の往來頻繁を極む即ち內地より北海道に行く旅客も又北海道より內地に行く旅客も陸路を取るには必ず玆を通らざるへからず貨物も亦然り、灣內廣くして幾多の船舶常に輻輳し函館室蘭等には日本郵船會社の定期船あり毎日往復して炭鑛鐵道との連絡あり、今定期船の出帆時間を記せんに午前十一時に青森を發せば午後五時に函館に着し、午後五時に函館を發せば翌朝四時に室蘭に達すへし、外に毎夜箱館行の臨時船あり。其賃金は函館まで上等金二圓七拾錢中等金一圓八拾錢下等金九拾錢室蘭まで上等金六圓三拾錢中等金四圓二

拾錢下等金二圓拾錢とす但し上中等切符を買はんとする者は電信にて旅店に前以て申込み買入れ置かるへし、

善知鳥神社は安方町にあり停車場を距る七町本社は大同年間の創立にかゝるといふ善知鳥といふことの由來については諸說紛々孰れか信なりや知るへからずといへども傳へ曰ふ允恭天皇の御宇烏頭安潟といふ人勅勘の身となり此の地に來りしが安潟の死後異鳥飛ひ來り雄はウトと鳴き雌はヤスタカと鳴きけるを獵夫雄鳥を殺しけるに雌鳥泣き悲み其獵夫亦非命に死せり里人雄鳥を厚く葬り塚を立てゝ祭れりと、今は毎年九月十五日を以て祭典を行ひ遠近の老若男女群集す、「陸奥の外が濱なる烏頭鳥子は安方の壁をのみぞなく」といふ歌あり、

合浦公園は市を距る東方十餘町の海岸にあり園は故水原衛作氏の經

營に依りて開設せられたるもの園内老松あり古櫻あり花時の風光畫も及はぬ程なり、南方は群山横り北方は海に對す青森第一の遊覽地なるへし

大星神社は市を距る南方一里餘の所にあり田村麿を祭る境内櫻樹あり春の末花盛りの候風景殊に好し。

青柳橋は柳原遊廓に通ふ所堤川の河口に架せる橋にして見返り橋の稱あり、堤橋は月見橋ともいふ堤町と榮町に通する所堤川に架せるものにして長さ五十餘間、近く耕田連り遠く八峰峙ち風景頗る好し(口繪參照)、外に橋の名あるもの朝日橋、石森橋、棧橋あり、

今青森市中旅店の大なるものを擧くれは鹽谷、鍵屋、中島、早瀬、山崎等なるへし、鹽谷は日本郵船會社旅客取扱所にして本店は濱町にあり支店は停車場前新棧橋眞向にあり本店の一町内に郵便電信局

あり各銀行等あれば旅客のためには便利なるへし本店より青森停車場までは十二町浦町停車場までは十三町車賃各金拾五錢とす宿料は特等金一圓五拾錢一等金一圓二等金九拾錢三等金六拾錢客室清潔器具清潔料理上品に何から何まで行屆けるは鹽谷旅店なるへし、

地の名産は米穀、海産物、帆立貝、林檎、塗物、蔓籠、昆布菓子、飴等なり、

當地を距る九哩(汽車賃三等金拾四錢)にして淺虫停車場あり近くに淺虫温泉あり圓光大師の發見にかゝるといふ青森灣に臨み風景の好き此の地方稀に見る所とす、

(注意鹽谷旅館本店所在地濱町より勝地への距離を記さんに合浦公園へ二十町善知鳥神社へ二町棧橋へ半町内青柳橋へ十三町堤橋へ十二町朝日橋へ二十町石森橋(一名思案橋)へ十二町、

陸奥の外か濱なる呼子鳥啼なる聲は善知鳥安潟（うたうやすかた）
子をおもふ涙の雨を笠のうへにかゝるもわびしやすかたの鳥

○弘　前

弘前市は青森を距る西南十里餘にして舊弘前藩の城市なり今は第八師團の所在地なり土淵川は市の中央を流れて平川と合し御厩川は岩木川より分れて舊城の濠に入り再び岩木川に注く、市街を上町下町に分ち舊城以東を上町と呼び以西を下町と呼ぶ戸數六千九百餘人口三萬、氣候は甚だ寒からず又暑からず先づ住みよき方なるべし、

弘前城は一は鷹城と稱し慶長十六年津輕信牧の築きしものにて今は公園となれり城内の天王閣、角櫓は高く雲間に聳へ本丸は眺望に富む、大園寺は鍛冶町の高臺にあり一目の下に全市を見るべし五重の塔あり、長勝寺は西茂森町にあり藩祖光信の開基にかゝり藩の廟所

とす内に光信爲信の木像あり廊下は鶯張とて名高し梵鐘は十三潟より引揚げしものにて北條貞時の銘あり七百年前の古物なり、八幡宮は北横町にあり老杉林をなして幽靜なり境内最勝院跡に番田半兵衛の墓あり（番田は芝居にていふ金井民五郎のことなり）慶長年間由井正雪の事に坐して罪を獲しが後に許されて此の地に來る、富見橋は紺屋町にあり長さ百有餘間津輕富士倒に影を清流にうつし景色よし、乳ヶ瀧は田代村にあり高さ十丈餘遠く望めは素練の中天より下るかと疑はる冬に至れば凍りて一大氷柱となり婦人の乳房に似たり、暗門瀧は川原平村にあり市を距る七里飛瀑三層に分れて高さ二十丈奇觀とす下流は岩木川となる、阿闍梨山は大鰐の南にある奇峰にして其形机の如く頂は平かなり昔し三千の精舍ありしといふ、千歳山は村茶屋と稱し藩の別館ありし所今は無し岩木山を望む

によし、座頭石は市の南一里にあり斷崖危立し溪深く松綠なり傳へいふ昔し一瞽者崖上に死し化石となりたるものと、長慶天皇の御陵は市を距る二里餘紙漉澤にあり、羽黑山神社は西方二里五代村にあり清泉あり眼病に効あり、高照神社は西方二里半高岡村にあり社殿莊嚴、岩木山は西方二里にありて津輕富士の稱あり大國主命を祀る祠は山麓にあり堂宇華麗奥の日光といふ評あり神橋、神門、拜殿、奥院等に至るまで盡く日光に擬し金碧燦爛人目を眩す八月一日登山にて甚だ賑し南麓に岳及湯段の温泉あり、大鰐温泉藏館温泉は各南方三里にあり川を隔てゝ相對し秋田市に至る街道に當る大鰐は梅毒、疝氣、疥癬等に効ありといふ、其外に駒越町の草秀寺住吉町の元住吉神社和德町の和德稻荷神社等見るべきもの多し、

碇ヶ關は南津輕郡にあり秋田路に行く驛次にして矢立峠の麓にあり黑石町も南津輕郡にあり津輕の支封たりし地にして米を產す、鰺ヶ澤は西津輕郡にあり日本海に面したる港なり、十三潟は西津輕郡十三村にあり周回六里日本海に通ず、

物產は林檎、米、織物、津輕、殼塗、(俗にバカヌリといふ)蔓細工等とす、此の地にては盛夏の候岩木山の雪を取來りて市中にて賣る、又近郊富田の水を汲みて賣る清冷無類、

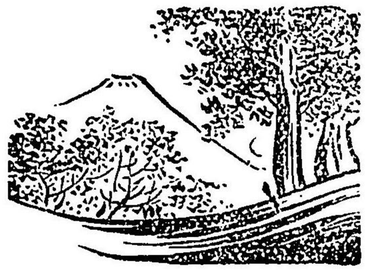
旅館城東館は元寺町にあり第八師團の御用旅館にして市の中央にあり客室器具の清潔はいふまでもなく待遇鄭重懇切にして大に勉强し居れり

東京より行くには上野より汽車にて青森に至りそれより弘前へと官設鐵道に乘りて行くべし汽車賃は下等にて東京より金六圓〇四錢青

森より金三十五錢

富士見てもふしとやいはん陸奥の岩木の嶽の雪の曙　定家

ほと〻きす木の間に見ゆる角櫓　史邦



渡島國

○函館

函館は五港の一にして繁華北海道に冠たり此地は全道の物産の集合地にして又貿易場たるを以て年一年と盛んになり漁業商業共に進歩するの勢あり殊に鯡漁の期節に至れは市内のにぎやかさ實に想像の外にあり馬車あり鐵道馬車あり電燈あり電話あり水道は各戸へ水を送り文明の利器大抵備る、函館公園は明治七年の開園にかゝり園内花卉多く眺望甚だよし、臥牛山は其の形臥牛に似たるを以て其の名あり登れば四望開豁海の景色山の景色共に偉觀に富む、五稜廓は明治元年榎本武揚等の據りて以て徳川氏のために謀る所あらんと期せし地市を距る二十餘町の所にあり、（口繪參照）

此の地は冬期の寒さ甚しきを以て暖地に生れたるもの凌き難きは勿論なれども夏は甚だ暑からず又暑の期間短きを以て大磯とか熱海とか人取込む所よりは避暑旁々地理の研究風俗の視察として北海道に來るの大に利益あることを信ず、物價は概して高き方なれどもさりとて内地有名の温泉場海水浴場の物價に比せば高い程にもあらざれば不經濟にもあらざるべし、旅館は海岸濱通りにあり角大、角上、岡七、丸和等重なるものとす、今岡七郎兵衛旅店の宿料を聞くに一等金一圓八十錢二等金一圓十錢三等金七十錢(但三食)同店は東濱町にあり日本郵船會社船客取扱所なれは旅客のためには至極便利なるべし且取扱も至極懇切にして客室清潔衛生等には尤も注意せりといふ、

相模國

○鎌倉

鎌倉は昔源氏の覇府を開きし所にして其後北條氏の據りて以て天下を制御せし處、今は東鎌倉、西鎌倉の二村に分る前は海、後は丘陵を負ひ東は金澤に通し西は七里が濱を過きて江の島に至るべし古へ繁華の地だけありて古蹟の見るべきもの多し左に其重なるものを擧けん。鶴ヶ岡神社は鎌倉停車場(新橋より三等金四十五錢但大船驛にて乘替の事)より五六丁の處にあり國幣中社にして應神天皇、神功皇后、仲媛神を祭る康平六年源頼義初めて由井が濱鶴ヶ岡に勸請し建久四年源頼朝此の地に移して鶴ヶ岡八幡宮と稱せり正面に神樂堂あり石階の傍に仁德天皇を祀れる宮あり靜御前の白雲蹈み分けて入

りにし人を慕ひ頼朝の前をも憚らす想夫戀を謠ふて一曲の歌舞を演せし處也。白旗神社は頼朝を祀れるもの豊太閤の好漢と云つて木主の背を拑ちしは此處なり石燈の左側に銀杏樹あり高さ數丈別當公曉の匿れし處本殿は縦九間横三間にして樓門には良恕法親王の親筆八幡宮の額を掲く藏むる處の寶物は觀覽料(金拾錢)を納めて觀るとを得べし

鎌倉神社(官幣中社)は鶴ヶ岡八幡宮の東北五六丁の處にあり明治二年七月の建立に係り大塔宮護良親王を祀る社殿崇高を極む社背に深窟あり入ると一丈許りにして下に折れ深さ二間底凡九坪暗黑なり建武二年親王足利氏の爲に此窟に幽閉せられ淵邊義博の手に弑せられ給ひし所なりと云ふ參拜するもの慷慨涙を催さゞるものなし嗟々、

源頼朝の墓は八幡宮より鎌倉宮に至る途の左方高き處にあり青苔深

くして文字讀むべからす

頼朝邸跡は八幡宮の東數丁金澤道の傍にあり今は全く農夫の鍬を入るゝ所となり、たゞ東御門西御門の名を存するのみ旅客こゝに至つて當年の事跡を追懐すれは轉た感慨に堪へさるものあらん、

建久封疆多變寺、　寺終廢壞文平藥、　千旅萬化不留跡、　昔日英雄骨又無

是れ澤庵禪師の詠する處宜なる哉

北條氏邸の址は寶戒寺の境内にあり北條氏九代の間茲に居りしなり滅後一族の遺骨は茲に葬られて寶戒寺成る、

公方屋敷跡は淨明寺の東にあり足利時代關東管領の住せし處、

滑川は上流を胡桃川といひ公方屋敷の前に來り初めて此稱あり青砥藤綱の逸話を傳ふ、

荏柄天神社は頼朝邸跡の東北にあり本社には菅公束帶の像あり

英勝寺は扇谷にあり門には後水尾天皇御宸筆の額を掲く境内は太田道灌の宅地にして英照院念佛道場を開きしが中頃にして廢れしを水戸中納言頼房の女尼となりて此寺を再興せり佛殿の釋迦佛は唐の陳和卿の作、

壽福寺は英勝寺の南にあり源頼義、義家東征の際暫らく此地に留まりしと云後ろに頼朝政子の塔あり寺門の東南觀音山に登れば望夫石あり傳へいふ畠山重保軍に由比ケ濱に趣かんとするにあたり其別離の情に堪へず働哭して此石上に死せりと、

建長寺は小袋阪にあり北條時頼入道の創建する所にして宋の僧大覺を開祖とす、

圓覺寺は建長寺の西南にあり佛光禪師の開く處にして北條時宗の創建にかゝる寺門は宋制にして後光嚴天皇の御宸筆を掲く境内には

岩窟觀音、開山塔、佛日庵、坐禪窟、虎頭岩等あり時宗、貞時、高時の書及尊氏自筆の法華經、南山自贊の畫像等あり、

長壽寺は龜ケ谷にあり足利基氏が尊氏の冥福を祈らんが爲に建てたるものにして尊氏束帶の像を安置す、

光明寺は亂橋村木座にあり開祖を記主禪師とす後花園天皇宸筆の天照山の三字を額として掲く

鎌倉の名所古跡一々茲に案内せんと欲せば尚數頁を費して足らざるべければ一先づ此位の處にて記者も一服すべければ旅客も旅館に就きゆるりと御休足めさるべし旅館は八幡前の角正、三橋樓支店、長谷の三橋を重なるものとす宿料は上等一圓五十錢中等一圓下等七十五錢晝飯は四十錢の定めなり、但此等は總て宏大なる旅館なれ共畢竟普通の驛旅籠に過きずして正午頃に着せば未だ浴湯の準備もな

き程の始末なれば到底一宿して清涼を貪る事は難かるべしされば旅客は此海岸海水浴場に往ゐて熱塵を洗ふか若くは直ちに江の島に車を飛ばするを可とす、

海水浴場に鎌倉停車場の距ること南凡十三丁青松白砂の間にあり其海濱院は西洋風の建築にして宏壯なるものなり温浴は機械仕掛にして館内に潮水を導き四時入浴するとを得遊客は重に外國人にして宿料は三圓以上なり若し直ちに江の島に向はんと欲する人は八幡前より車を雇へば五十錢以内にて足るべく大佛前よりすれば三十八錢の定めなり途中觀るべきもの甚多し例に依て其重なるものを紹介せん、

長谷寺は長谷にあり本尊は十一面觀世音にして春日佛工の作（拜觀料は二錢、）

大佛は長谷寺の北にあり高さ三丈五尺膝の廻り五間半青銅の盧舍那

佛にして建長年間の鑄造に係るといふ大佛前には鎌倉及江の島の名所寫眞を鬻くものあり、

化粧阪の路傍に景清の土牢あり牢内三四疊を敷くべし昔景清、鎌倉に下りし時幽憤湯水を斷ち此中に死せりと、

其他由比ヶ濱、袈裟掛の松、稻村ヶ崎、日蓮上人籠屋の跡、權五郎景政の社、西方寺が谷、星月の井、行合川、音なしの瀧等の名所古跡を左右に見て進めば名にしおふ、七里ヶ濱絶景に心も奪はれんばかり、やがて腰越に出で行けばこゝには有名なる滿福寺あり昔源義經平氏を平げて鎌倉に入らんとし此地に來りしに梶原景時の讒により頼朝に拒まれ辨慶をして陳疏の書を認めしは此寺なり境内に辨慶腰掛の石、硯の池等あり、尚進めば片瀨といへる處に到る、

片瀨は宗尊親王の「歸り來てまた見んことも片瀨川濁れる水のすま

ぬ世なれば」の御歌を殘し給ひし處、日蓮上人大難の一ヶ所たる龍の口其他新田義貞大庭景親等の古跡見るべき處多し昔時撫子の名所なりきといふ唐土ヶ原もまたこの近傍にあり景色は西に富士、東に三浦三崎、前に江の島を見て中々面白し毎年學習院生徒の海水浴場となる一昨年頃迄片瀬館といへる旅館一軒ありしが今は廢業してなしされば此地に海水浴をなさんと欲する者は近傍の素人屋の室を借りるか又は橋を越て江の島の旅館に宿泊せざるべからず、

○江の島

江の島に遊ばんとするもの鎌倉よりすれば凡二里此間名所古蹟頗る多し（鎌倉の項參照）其七里ヶ濱に到れば淨沙一路一帶の丘阜に沿ふて走り左手は碧波縹渺遙かに豆相の連山を望む繪ける如き江の島は行く手の小丘片瀬の海岸に相對して波上に浮ぶ、翠綠の蔭かす

かに旗亭の碧瓦を見るこれぞ天下の奇景を收めて客をまつもの（表紙の石版繪參觀）、若し路を藤澤にとれば一里半此間には尋ねて見るほどの名所なし、只藤澤に清淨光寺のあるのみ此寺は時宗の本山にして代々の住職を遊行上人と稱す故に遊行寺といふ片瀬町の窮まる所に丘あり軟沙を踏んで登れば眼界忽然として開き江の島其前に横はる壯快言ふべからず、これより一條の砂路を通り假橋を渡れば左右皆酒樓と旅館左方高く見ゆるは惠比壽屋にして右側の高樓を讃岐屋とす（昨年新坐敷を增築してより從來の眺望に一層の風致を添へぬ御手輕にして心安きは此樓なり）岩本樓は其の奥にあり鳥居の左、老樹の茂ける間を迂廻して登ればこゝに金龜樓ありさきに七里ヶ濱より遠見せしは即ち此樓にして眺望の快濶なること島内第一とす特に堅い宿屋との評あり、此他北村屋、江戸屋、堺屋等の旅館あり

遊客は思ひ〳〵の旅舍を選びて茲に小憩し案内者を雇ふて（十錢）名勝を尋ぬべし、

島中には遐津中津奥津の三祠あり總て縣社にして遐津宮の後ろに古碑あり僧良眞宋國より齎らしゝもの、中津宮には後宇多天皇の敕願、文覺上人の額、弘法大師作の獅子、本多平八郎の槍、鎌倉權五郎の弓、日蓮上人の筆、政子の如意寶珠、北條氏政の筆などの寶物を藏む奥津宮の西、掛茶屋の在る所を下に降れば蒼巖上平かにして席の如き所ありこゝに三個の碑を建つ一は佐羽淡齋の詩を錄す今は剝落して讀むべからず他は南郭、芭蕉二翁の詩句を刻す、

風濤石岸鬪鳴雷、直撼樓臺萬丈廻、被髮釣鼇滄海客、三山致處蹴波開、　南郭

うたがふな潮の花も浦の春　芭蕉

といへるもの是、兒ヶ淵は即ち此脚下にあり絶壁數丈削るが如し傳

へいふ往昔建長寺に自休藏主といふ僧あり（奥州信夫の人）辨天へ參詣せる時鶴ヶ岡相承院の兒童白菊に邂逅し戀慕措く能はず身の程も忘れて口説きけるに兒は中々從ふべくもあらねどさりとてまた其情の切なるに感じけん扇に「白菊としのぶの里の人問はゞ想ひ入江の島と答へよ」「うき事を思ひ入江のしまかげに捨つる命は波の下草」といへる二首の和歌を書き殘して此淵に投ぜり自休追來り悲惜の餘り「白菊と花の情のふかき海に與に入江の島ぞうれしき」とないへる歌を認めてまた此淵に沈みけると、兒ヶ淵の傍崖に沿ふて左すれば龍窟あり洞口南に向ひ廣さ丈餘深奥幽暗にして常に燈火を點し鬼氣人を襲ふ入ると四十餘間、窟岐（わか）れて二となり更に入ると二十餘間右には辨財天を祠り左には大日如來を安置す日蓮上人寢姿の石、弘法大師御加持の水等あり、

相模國　江の島

凡繪の島の全嶼は總べて巖より成り欝蒼たる樹林之れを包み到る處住麗ならざるはなし唯文字拙劣にして其萬一を描くと能はざるを悲む即ち佐羽淡齋翁の詩をかり左に錄して其責をふさかん

瑣沙一路截路通、　孤嶼峻嶮屹海中、　潮浸龍王宮裏月、　花香天女廟前風、
客樓斫鱠絲々白、　神洞燒燈穗々紅、　幾入蓬萊諦秘跡、　不須幽討覓仙童、

此地は概して生産力に乏しく魚類の外大抵の物は皆他より供給を仰げとも各地競爭の結果か物價比較的高價ならず大磯などに比すれば却て大に低廉なるを覺ゆ殊に心神を養ふ點よりいふも俗化されたる彼に優るといふ迄もなし今江の島旅館一定の宿料なりとて讃岐屋の報告をきくに普通一泊四十錢以上なれ共上客は金八十錢、一圓、一圓五十錢の三等に區別し晝餐は金二十錢より一圓までなり、東京藤澤間汽車賃三等四十六錢藤澤より江の島間人力車賃金二十錢（旅館

まで手荷物を持參する賃錢共）又毎土曜日、日曜の兩日には新橋驛より三日間通用の往復二割引の切符を發賣せり但鎌倉藤澤は同哩に付何れより下車し又は東上するも差支なき規定なり、

貝細工は精巧を以て聞ゆ遊客の土産（みやげ）として頗る妙

○逗子海水浴

逗子は鎌倉の次の停車場の西數町を距る一帶の海岸を云ふ、四邊の光景瀟洒幽雅にして俗塵を厭ふ遊客の杖を曳くに適す江の島の如き繁華はなきも暑中などは附近の農家に至るまで避暑の客を以て滿たすといふ石黒軍醫總監、嘗て此地に靜養して頻りに其好海水浴場たるとを稱賛せしとありこの近傍には尊き御方の御用邸をはじめ貴顯の別莊多し、旅館にして割烹店を兼ぬるもの數軒、養神亭は頗る好評なる旅館にして貴紳の宿泊にも適す、停車場より僅かに十町車賃

八錢(風雨の際は二三割增)海岸の好位置を占めて眺望に富み清涼の福地に遊ぶの感あらん葉山の日蔭の茶屋も亦勝景の地を占め停車場よりの人力車賃は十二錢雨天の時は十五錢宿料は一泊上等金一圓二十錢並金六十錢昼飯料は金二十五錢より六十錢迄とす、外人の宿料は一泊金二圓以上の定めなり、(養神亭も同樣)

白鷗容與一灣青、　蓮嶽浮杯酒亦靈、
散髮海樓人嘯傲、　天風吹淨養神亭、　(學鷗)

○松輪海水浴

松輪は相州三浦郡の南端にありて西は三崎に連り釼崎の燈臺に近く前は安房の鋸山と相對す、東京越前堀より汽船に乘れは五時間にして達すべし船賃金二十錢なり、海水浴旅館は松輪館と云ふ客室數十あり、百名の客を宿せしめて自由なり、宿料は一泊金一圓二十錢を上等とし以下金一圓、金五十錢の三等に分つ

○鵠ヶ沼海水浴

鵠ヶ沼は藤澤停車場を距る南一里、片瀨、江の島より濱つゞきの海岸にして遙に相房の翠巒を望むとを得、眼界頗る寬なり地は砂地にして松樹茂り旅館所々に點在す鵠沼館、三升樓、東屋、待潮館その大なるもの、別莊亦多し此地は近年開けたる所なれ共、水清く波穩かなれば婦人と雖も危險を感ずるとなし、

よもすがら海士の苫屋のこゝちして枕に近き波の音かな　(雅子)

○大津海水浴

横須賀停車場より南二十丁の海濱にして左に本牧、右に觀音崎を臨み風光頗る佳なり曾て第一高等學校の海水浴場となりしことありしといふ海水甚だ清澄にして人身に適す旅館を男勝館といふ家屋宏壯

にして眺望よし

○茅ヶ崎海水浴

大磯の便利あるにあらず、江の島の奇景あるにあらすと雖も、圍洲の別莊あるが爲め俳優の往き來多きを以て茅ヶ崎の名ははやく既に都下の婦女子の間に喧傳せらる其海水浴場は停車場を距る八丁の海岸白砂青松の間にあり旅館に茅ヶ崎館あり今同館の宿料をきくに上等八十錢一定なり停車場より車賃八錢、

○大磯海水浴

大磯海水浴場は大磯停車場を距る南方五六丁の海濱にあり南は太平洋に面し水天渺茫、西には富嶽、東には繪の島を望み風光明媚、

雲にあけ波にしらみて朝なゝきのふに似たる海山もなし

とは能く此地の實境をうつせるものなり昔、ときめきし鎌倉武士が

風流を極めしは實に此地なりしが暫くにして時勢は無殘にも寒村荒驛と化せしめしを明治九年に至り軍醫總監松本順氏此邊の潮水の人身に適するを見て海水浴場を設けしより年一年と繁華を增し今日は東京附近に於ける最も華奢なる最も贅澤なる海水浴場となれり隨て風俗淫猥に流れ人情輕薄となり病者の靜養に適ぜず殊に現今西の須磨と共に肺病の如き傳染病患者の來り療養するもの多きを以て壯健の者には反つて危險の虞あり

此地には郡役所あり郵便電信局あり裁判出張所あり、玉突場、大弓店、新聞雜誌等何一つ不自由を感するとなし

地の東は延臺寺あり虎子石なるものあり石は橢圓にして高さ二尺ばかり面に鏃の痕あり傳へ云ふ曾我十郎此地の妓虎御前と相親む、工藤祐經人を派して虎の家に至らしめ矢を放ちて祐成を殺さんとせし

に矢は石に當りて祐成は無事なるとを得たり故に十郎身がわり石ともいふ東して兩側松並木ある所是むかしの化粧阪の跡にして更に東行すれば有名なる花水の橋あり東海道名所記に

花水の橋長さ四十三間あり大磯の長者が跡今にかまどのかたばかり殘れり、昔關東の諸大名にこびて世を渡りしが今は絶はて丶竈の跡のみのこりて論語の文にかなへるにや、その屋漏にこびんよりはむしろ其かまどに媚びよといへるは此事か、

今は其かまどの跡だに無し、花水の橋又世と共にかはりて目下は怪しきペンキ塗りの橋とはなりけり彼の一時俗氣を以て仙境をけがすとの世難を受けし月ヶ瀨橋と一對といふべきか、

小磯は大磯の濱つゞき三四町の所にあり蓊鬱たる松樹林をなし境自から閑靜なり、其鳴立つ澤の古跡には西行の木像あり文覺上人の刻

せしものにして側に虎子堂あり、虎御前の像を安置す鳴立庵の寶物には西行の手蹟、竹杖、葦の床柱あり錢を徵して人に觀せしむ高麗山の半腹に梅樹數千株あり俯して大磯の全景を見るべく遙に豆相の峰巒を見るべし山頂に高麗神社あり、山下に高麗寺あり、

大磯の旅館中大なるものは招仙閣、禱龍館、太田樓、甲喜樓、長生館とす外に松林館あり新橋花月の支店にして夏季のみ開店す

於朝於夕浴煙波、　海國從來清風多、
金匱青囊難及處、　醫來肺腑百年痾、（羽峯）

○國府津海水浴

箱根、熱海、小田原若しくは伊豆山に赴く人は國府津停車場より下車せざるべからず、地勢は北に山を負ひ前面は遙に相模灘を隔てゝ總房の連山を見、海面より來る風は爽涼にして海氣を含み、頗る人

體によし、海濱の小丘、唐津は親戀上人そのむかし唐土より一切經を携へ歸り給ひしとき着船せし處なりと傳ふ、旅客は是非一訪せざるべからず、唯其古跡たるの故のみにあらず、眺望の快濶なること、蓋し旅情を慰むるに足るものあらん、近傍の中村といへる處は曾我の祐成、時致兄弟の故郷なり、されば此邊二子の舊跡少なからず、名物には密柑あり、海水旅館は蔦屋、國府津館等とす、宿料は五十錢以上種々客との相談によつて定むべしとなり、

○酒匂海水浴

酒匂は國府津より小田原に到る途中に在り、昔時の東海道中所謂、蓮華臺越の一にして廣く世に知られたれども、東海鐵道開通以來一時世人に其名を忘れられ居りしが、元來此地は地質冲積砂屬より成るを以て飲料水の性質極めてよく氣候も温和にして空氣清潔加ふるに東南相模灘を控へ、北方は廣濶なる田野を越えて遙に足柄山を望み酒匂川、村の西端を流れて景色可なり、殊に此地は朝夕定りて吹く風あり、其海面より來るものは爽凉にして海氣を含み頗る人體の活力をますといふ、されば近來別莊を建つるもの少なからず、且電車鐵道の便もあれば、かた〳〵來遊する人追々多くなるは、嬉しきことなり、旅館を松濤館といふ、十餘の貸別莊いづれも小奇麗なり、貸賃は十圓内外より四五十圓位まで室の大小によつて區別あり、

○小田原海水浴

昔は北條氏によりて顯れ、今は伊藤侯の滄浪閣によりて屢々其名を耳にする相州小田原、其海岸は波靜にして海水浴に適するとて先年此所に海水浴場を設けたり、さすがに適當の避暑地と謂ふべし、其

景色は酒匂と大差なし、古跡には小田原城趾、報德神社、松原神社、石橋山等近傍に散在せり、名物は有名なる虎屋の外郎をはじめとして漬物、しほから等あり、

旅館には鷗盟館、中松屋、小伊勢屋、片岡屋等名あるものなり、國府津にて十三錢を投すれば電車は三十分間にして小田原まで運び呉るゝなり、

よる波をこはしといひしをさな子も
貝ひろふまで浦なれにけり　　萩の家

○箱根

旅客新橋より汽車に乘り國府津にて下車し電車に乘れは一時間足らずにして湯本に達すべし、

湯本温泉は湯板山の麓より湧き其色透徹して底を見るべく冷温五體

に適す、温泉宿の重なるものは福住九藏小川萬右衛門にして他に旅館多し、西南に金麗山早雲寺あり北條早雲の建立する所にして北條氏五世の墳墓あり、

湯本より溪に沿ふて登ること五六町にして塔の澤温泉あり、温泉は皆湯阪山の麓又は勝驪山より湧き出づるものにて温泉宿は玉泉樓(堀貞藏)玉の湯(福原遠藏)環翠樓(鈴木善左衛門)一の湯(小川鎌太郎)藤屋(安藤德治)、福住樓(長谷川まつ)の六軒あり、塔の峯に阿彌陀寺あり、寺を少し離れて小丘あり明の朱舜水曾て此の地に至り景色の美なるを愛し驪山に勝るとて勝驪山と名づけしといふ、

宮の下温泉は底倉村字宮の下にあり地は海面を抽くこと一千百二十尺、鷹の巣の山を負ひ早川に臨み眺望に富めること七湯中第一なるべし、郵便電信局村役場等あり、温泉宿は富士屋奈良屋の二軒あり、

堂ヶ島温泉は底倉村字堂ヶ島にあり地卑くして眺望に富まされども境、頗幽静なり、温泉宿は近江屋大和屋江戸屋の三軒あり、

底倉温泉は底倉村字底倉にあり、温泉は神靈湯、萬壽湯、靈仙湯、の三つに分れ温泉宿は梅屋牧太郎、仙石屋丈助、外一軒あり、蛇骨川の上流に蛇骨に似たる奇石を産す、昔し秀吉の浴せしといふ太閤風呂あり、傳へいふ昔し新田義興義兵を起し奥州にて戰ひ敗れ、走りて此地の温泉の金創に奇効あるを聞き、入浴を試みてける程に暫くにして癒えけるが足利氏の知る所となり太刀を提げ裸體にして戰ひ討死せりと、されは村人の義興を惜むこと今日に至るも一入なりとぞ、小涌谷温泉は底倉村字小涌谷になり泉質は硫氣と鐵分とを含み僂麻質斯貧血症に特効ありといふ、温泉宿は開化亭、三河屋の二軒、

木賀温泉は仙石村字木賀にあり泉質鹽類泉にして上の湯仙石新湯、菖蒲の湯、岩の湯等にして温泉宿は龜屋、伊勢屋の二軒あり、

蘆の湯蘆の湯村にありて南に二子山峙ち西に冠ヶ嶺聳へ海面を抽くこと二千七百六十尺、温泉は仙液湯、達磨湯の二所に分れ温泉宿は紀伊國屋、松板屋、吉田屋あり、泉質は多量の硫黄を含む、僂麻質斯、皮膚病、依卜昆里亜、邊斯底利等に特効あり、箱根驛に往く途中に曾我兄弟及虎の墓又多田滿仲の墓もあり、

外に仙石下の湯姥子温泉湖尻温泉等あり、

大湧谷は一に大地獄と稱し小湧谷の西北にあり、半腹より頂上に至る間硫氣燃へ熱水迸り其近くは土燒け草木枯れ地皮脆弱となり誤りて陷めは半身は焦熱地獄の苦患を見るべし、頂に閻魔堂あり上れは眼界甚寛、

蘆の湖は箱根山頂にあり周圍四里三十町下流を早川といふ、湖中に島あり搭ケ島といふ、富士山倒に水に映ることあり倒さ富士といふもの是れ「玉くしけ箱根の山の峯ふかくみづうみ晴れてすめる月影」とは茲を詠せるなるべし、

湖畔の箱根神社は瓊々杵尊彦火々出見尊を祭り天平寶字元年の創立に屬し蘆の湖の東岸にあり、昔しは金剛山東福寺に屬し、孝謙天皇を初め代々の天皇幣帛を納めたまひ阪上田村麿、源頼義源頼朝、北條時政等英雄豪傑の士表矢を獻じ社殿莊嚴を極めけるが今は大に頽廢せり、曾我兄弟を祀れる曾我祠あり、

箱根驛は箱根嶺上にあり蘆の湖の南に當る、西端は即ち古へ箱根の關のありし所にて人馬織るが如く往來頻繁なりしも今は僅に斷礎を見るのみ、宿館の大なるものを土生屋四郎右衛門、石内彌平太、と

いふ、地は風光に富めるを以て夏時避暑に赴く者多し、

乙女峠は仙石原の西方にあり頂上に上れは富士山は前に聳へ眺望頗る好し、箱根より富士登山を試むる者は此の峠を越し東山を過ぎ御殿場に出づるを可とす、(此間二里)、

早川は源を箱根の湖に發し早川村に至りて海に入る「早川の瀬ぎり危き船渡りそがひに向へ道遠くとも」と詠せし如く實に水流急にして兩岸は絶壁連る、朝日橋玉の緒橋千歳橋は皆此の河に架するもの、

箱根名産として世に聞ゆるものは挽物細工寄木細工とす、此等は湯本細工の稱あれとも今は多く宮の下邊にて賣る、

都出でゝけふ越え來れはうたにきく箱根八里はみな秋の風　　鐵幹
玉くしけはこれの山の明方に雲をふみても我はゆくらん　　信綱

夏は唯名のみなりけり蘆の湯に物する人よ袷もてゆけ　　嘉朝

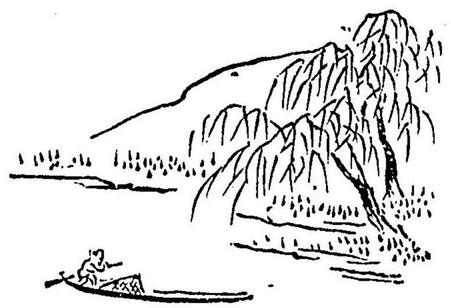
○眞鶴海水浴

眞鶴港は小田原より熱海に到る沿道、海中に突出したる所に在り山を負ひ海に瀕し風景佳なり、海水浴場は近年の開設にかゝるを以て其の名甚だ高からずと雖ども地は源右府の逸話を傳へ亦是れ好個の避暑地なりとす、

旅館を眞鶴館（櫻井彌三郎）といふ、東京よりの順路は東海道線國府津停車場にて下車し、それより電車にて小田原早川口に至り人車鐵道に乘替へ眞鶴に達す、此間六時間を要し旅費は新橋より總計一圓十七錢とす、（新橋國府津間三等七拾錢、國府津小田原間十三錢、小田原眞鶴間三十四錢、）

雨餘庭草綠將迷、　螢也雖肝何處捜、

幽咽一蟬驚出樹、　殘聲曳過夕陽西、　（星巖）



伊豆國

○伊豆山

走湯の神とはうべも言ひけらし速きしるしのあればなりけり、と藤原兼房の詠じし所謂はしり湯とは伊豆山温泉の稱なり、東海道名所記に、

伊豆の山は走湯山ともいふこゝにまします御神をば走湯權現と申奉る昔鎌倉の右大將伊豆箱根を信じつねに二所參詣をいたし給へり此所に出湯あり石走る瀧の如くなれば走湯とは申すとかや

とあり、泉質は明礬、硫黄を含み、胃病、腦症、れうまち、脚氣、皮膚骨節諸患、神痙痛、其他婦人病に特効ありといふ、地は伊豆山を負ひ、相模灘に臨み、東は總房の諸山に對し、南は伊豆群島を雲

烟の間に眺め、眺望の快濶なること熱海をしのぐ、近傍遊覽すべき所は、役の行者の松、初島、日金山十國峠、般若院大師、甘祿園伊豆神社等數多あり、古歌に「五月闇こゝるの森にほとゝぎす人しれずのみ鳴き渡るかな」といへる古々井の森は此伊豆神社の境内のことにして、いにしへは郭公の名所なりきとかや、氣候は大暑といへども八十三四度を超へず、酷寒にても五十四度を降らずといへば避暑避寒ともに好適の地といふべし、旅館には相模屋あり、浴室は三等の槽を設け之れを冷温熱の三に分ち又た長さ拾間幅三間の大游泳室を設け（温泉滿溢）數流の湯瀧落下す下には小船を浮べて娯樂に供す、實に類稀なる勝仙界と稱す可きなり、又別に貸切浴室、海水温浴（二重構造にして中央に海水を入れ周圍より温泉を以て温むるもの）等の備あり、又湯瀧は雄瀧、雌瀧の二に別ち雄瀧は勢強くして

強壯者の浴するに適し、雌滝は勢弱きが故に病衰者又は婦人の浴するに善し、止宿料は一週間三圓五拾錢より七圓までとし外に自賄と稱して三食ごとに注文せる品のみを調進す、まことに手輕にして便利なる方法なり、此方法に依れば一週間二圓二三拾錢位にても足るべし、魚類は多くして新鮮、殊に鮑はこの地の特産なりといふ、

東京より往くには國府津停車場にて下車し電車鐵道に乘じ小田原を經て行くが順路なり、此間三時二十七分の時間と五十八錢の人車鐵道賃とを要す、若し海路をとらんと欲せば東京靈岸島出帆の汽船にて熱海に到りそれより人車鐵道に乘ずるをよしとす、熱海伊豆山間十八町、人車鐵道賃八錢なり、熱海、小田原、國府津間また日々二艘の汽船往復す、

○熱　海

熱海といへば兒童も能く其温泉場たることを知る、地は伊豆國田方郡にありて日金山の東麓にあり三方山を負ひ一面海に向ふ故に避暑に適するのみならず亦冬時寒を避くるに適す、舊記に曰く仁賢天皇四年蚊島某罪あり獄中に死す帝その屍を熱海に投せしめたまひしに其時初めて温泉湧出して魚介盡く死せりと、説の眞僞保すべからずといへども亦以て其開けしことの早かりしを知るに足る、

小田原より豆相人車鐵道に乘りて午前七時二十分に發せば米神、江の浦、眞鶴、吉濱、門川、伊豆を經て十時廿分に熱海に達すべし、其賃金六十六錢なり、又熱海を中心として各地への里程を記せば、

靜岡市へ二十三里八町沼津へ七里三十町三島へ六里十五町輕井澤へ二里七町修善寺へは八里二十八町下田へ十八里十八町伊東へ五里二十町小田原へ七里國府津へ八里十八町伊豆山へ十八町湯本へ八里餘

東京へ二十八里十八町とす、

昔は熱海七湯と稱して大湯清左衛門、小澤湯、風呂の湯、河原湯、太郎湯、野中湯のみなりしが地を穿つ二三尺忽ち温泉の湧くを以て今は增して古屋の湯、鱗の湯、水の湯、伊勢屋の湯、尾張屋の湯等合せて二十餘湯となれり泉質は、食鹽泉に屬し脚氣水腫、子宮病、氣管支加答兒、腺病等に時効あり、二十餘の内最も奇なるは大湯にて一晝夜に三たび時を違へず湧く、時には長湧することもあり、例へば午前一時に湧き初めば十二時まで湧き續き午後一時に止むそれより一滴も湧かず翌日より湧く、其初め湧くや蟹の泡を噴くが如き聲して少量湧き暫にして沸騰するや喞筒にて水を灑く如く熱湯迸り出て〻近きあたりは熱き雨の降る如く其音や凄し、

大湯の傍に嗡氣館あり故岩倉具視公此地の嗡氣患者に効あるを認め

同志と共に建設せるものにして結搆宏大中央に機關を設け沸騰の度毎に患者をして呼吸せしむ、醫學博士中濱東一郎氏浴醫長たり時々出張して診察せらる、

梅園は熱海を距る十町許の山中にあり、今を距る十五年前故茂木惣兵衛其他の人に依りて開設せられ梅、松、櫻等數萬株を植付けしが今は成長して毎年十二月中旬より三月中旬迄は花の世界となる、

温泉寺は新宿にあり、南朝の忠臣藤原藤房此の地に來り世を遁れて佛門に入り授翁和尚と稱へ當寺の開祖となりたりと傳ふ、境内に藤房手植の松とて今尚在せり、

魚見崎は南は伊豆七島を望み東は房總武相の風景双眸に集る、

錦浦は念佛山の麓、曾我濱にあり、兒島、烏帽子岩、碁盤石、霰石等の奇岩怪石斷續して頗る奇觀を極む、

海水浴場は魚見崎の下及八幡前横磯等にあり、海水は能く人身に適し且清潔なれば夏季游泳を試むる者亦多し、

柳北漁史嘗て熱海に遊び記あり其一節に曰く、

唯一の闕點と謂ふへきは市中に牛肉を鬻く者なき是れなり牛乳は毎朝發賣すれども牛肉店は全く廢業す漁史僅に罐詰の肉を以て滋養に供す古の唐人が魚と熊掌と兩得し難きとか何とかいひたりき漁史も今魚と肉とに於て其一を缺くを嘆せんとす噫熱海も未だ村の字を下すを免れさる乎蓋士人中十の七八は猶牛を食はさる人種ならん、

漁史をして今の熱海を見せたきものなり

温泉宿の重なるものは、富士屋、相模屋、眞誠社、對孝樓、氣象萬千樓、小林屋、鈴木屋、香露館、阪口屋、尾張屋、高砂屋、鱗屋、

山田屋等なり、

○伊東温泉

伊豆國田方郡伊東村にあり、南西北の三方は天城山、箱根山を負ひ東方は海に面し、松川其中央を流る、東三里を隔てゝ初島を白波の間に望み房總の遠山を水天髣髴の間に認む、左は宇佐美の大崎、伊豆山眞鶴崎にして右は亭午島波濤の間に横る、灣上常に無數の船舶碇泊して閑鷗の浮ぶ如く、眞に好個の避暑地なり、

温泉はもと三源泉なりしが近世に至り發見して二十餘湯に及へり、猪戸温泉は松原區猪戸町にあり、傳へ云ふ往時此の地は荒蕪に屬せしを野猪の負傷せるもの此の叢中に來り創の癒ゆるを見て初めて特効の温泉あるを發見したりと、初めは浴客も少かりしが今は大に繁榮の地となれり、泉質は鹽類泉に屬し無色透明無味無臭にして慢性

僂麻質斯、疥癬等に効あり、

出來湯は松原區の西にあり源泉を桝湯といふ、寛永年中の發見に係るを以て此の名あり、泉質は硫氣ありて刀傷及鳥獸の咬傷に効あり傍に新湯と稱する温泉あり、後側に湯坪を穿ち牛馬の浴場とす、

和田温泉は伊東村玖須美にあり、上湯、外湯、大坂屋湯、新湯の四泉あり、痔漏、打傷、諸瘡、僂麻質斯、婦人血の道に特効あり、慶安三年始めて浴室を開き御前湯と稱して江戸城に献上したりといふ、江戸にて伊東の温泉とて藥湯の名高かりしは此の温泉なりしといふ、

湯田温泉は松原區辰の新田より湧く、眼疾に特効あり、外湯は混浴に供し内湯は客の入浴に供ふ、

伊東海水浴は伊東村湯川松原玖須美の海濱にあり、地は伊東の中央

に位し、水清く浪穏にして好海水浴場なり、

伊東温泉近くにて尋ねて見るべきもの多し、伊東十二景は故濱野建雄の撰する所にして、瓶山の旭日、鐘田の炊煙、物見の孤松、田城の野興、初島の漁火、松川の逍遙、横磯の群鷗、停子の宿鵜、玖須美の社松原の歸帆、音無の神事、五山の晩鐘とす、一々詩歌を以て其風景をうつせるものあれども茲に略す、

噴潮岩は新井區扇山海岸の洞窟なり、奇岩怪石に富み伏す者起つ者横る者千態萬狀なり、傍の絶壁海に臨みて屹立すること三四丈其下潮の浸せる處に一の竇口あり口狹くして内容は廣く滿潮に至れは波浪來去して竇口に激し潮烟を噴出すること數丈、其狀銀屑を散する如く水晶簾を捲しか如く奇觀言ふべかゝらず、堀川春江の詩あり乍疑白虹迸又訝長鯨噴と實境を寫したるものなり、

日蓮上人の遺蹟、小室村川奈區にあり、弘長元年上人配流の陸、寓宿せるに因り里俗之れを御岩屋といふ、

とゝろきが淵、源頼朝の子千鶴丸を沈めし處なりと傳ふ、

伊東祐道の墓、松原區地藏原村にあり眺望よき處なり、

河津祐泰の墓、對島村にあり、祐泰は安元二年十月赤澤山の下に於て大見小藤太、八幡三郎の爲めに狙撃せらる、今尚赤澤山腹に椎の古木あり是れ大見八幡の二人祐泰を射るために楯に取りたる木なりといふ、其他同村石脇畠に手投石あり、富戸區に産衣石あり、八幡野の隣に河津三郎俣野五郎が角力場の蹟あり頼朝腰掛石あり、

熱海より上下、多賀、網代、宇佐美を經て伊東に至るは順路なれども道路峻坂多くして人力車さへ通ぜざれば初めより漁船に乘るを便とす、熱海伊東間船賃並三十錢、東京よりは從來隔日の船便ありしが東京灣汽船會社は乘客の便を圖り毎朝出帆することゝなしたり、東京伊東間船賃は中等壹圓四十錢並九十錢なり、また伊東より下田へは中等九十錢並五十五錢の定めなり、

温泉旅館は猪戸にては樹屋(菊間鶴藏)山田屋(井原半助)湯本屋(芹澤恒三郎)玖須美にては養眞館(小原歌)大阪屋(野田宗兵衛)及湯端の前田屋(前田秀夫)寶來屋(武智功之助)をおもなるものとす、今樹屋の宿料を記せんに宿賄にすれば上等一泊金六十錢、中等金四十錢、並金三拾二錢、上等晝飯料金二十錢、並金十二錢とす、又自賄にすれば席貸は一週間、八疊金一圓五十錢、六疊金一圓二十錢、四疊金一圓にして、寢具は品質の良否によりて差あれども木綿夜具なれば一夜一組金二錢より金十錢まで絹布夜具は一夜一組金三十錢なり金四十錢までとす、米、味噌、醤油、薪炭、油等は旅館にて客の需め

に應ずべく魚類、野菜は各自好みの品を求めて調理するを得べし、此地の産物は海産物を重なるものとす鯛、鰹、鰯、海老、烏賊、鮑、章魚、海鼠、鰤、海苔、和布等にして川魚には松川唐人川より産する鮎、鰻、鰌等あり、外に伊東みやげ、と稱する菓子あり、温泉を用ゐて製したるものにして眞に伊東のみやげとして珍らしく又た伊東名所煎餅、伊東温泉練製粟の水飴、初夢煎餅、饅頭等いづれも風味よき物なり、

磯川流入海、　海岸沸清泉、　不用懸瓶汲、
滿槽常溢然、　濟人甘冽味、　最在癆炎天、　（春　江）

○修善寺温泉

修善寺温泉は君澤郡修善寺村にあり、南北に山を負ひ東西は開けてさながら藥研の底の如し、桂川は其の中央を貫通し、奇岩、中流に

崛起し水之れに激して飛沫は雪の風に吹かるゝ如く、急湍は白練を飜へすが如し、二橋を架す渡月橋といひ虎溪橋といふ、

温泉湧口は獨鈷湯、眞湯、河原湯、箱の湯、杉の湯、瀧の湯、岩の湯、花の湯、菊の湯、菖蒲湯、寺の湯、明治靈泉、大日靈泉等あり、就中獨鈷湯は有名なるものにして桂川の中流に湧出し岩を穿ちて湯槽とし板を以て其中を畫し冷温二湯に分つ、岩上に獨鈷形の石標を立つ、泉質は鹽類泉にして梅毒、疥癬、子宮病、痛風、痔氣、胃加答兒、腸加答兒、肺炎、レウマチス、皮膚病に特効あり、

修禪寺は人皇五十二代平城天皇の御代、空海上人の開山に係りしといふ、源範家、梶原景時の爲めに襲はれて自刄せしは此の寺なり後源頼家もこゝに幽閉せられ浴室にて暗殺されたり、されば寺の寶物多きが中にも源氏に關するもの頗る多し、

三州園は桂川の南にあり、古は指月の岡と稱せり、昔尼將軍此の寺に來り右府を追想して月に對し歔欷嗚咽之を久ふせりと傳ふ、後荒廢に屬せしが近年に至り村民某々等の力に依り今は一の遊園となれり、

正覺院は昔空海上人の修行せし處なりと傳ふ、寺は頗る幽靜にして三伏の候と雖ども涼風骨に徹し夏にして夏を知らずといふ、

その他、賴家の墓、範賴の墓、月見ヶ岡、御庵洞、日枝の社、蝦蟇ヶ淵、稚子瀧、白糸瀧、太白山、紙谷瀧、旭瀧、淨廉寺瀧、等見るべきもの多し、

温泉旅館は柳屋(湯川廣吉)野田屋(野田八郎平)菊屋(野田修治)養氣館(相原平八)對碧館(淺羽保右衛門)衛生館(大川彦八郎)四方樓(柳田いせ)江戸屋(後藤龜之助)等あり皆な桂川の兩岸に軒をならべ

り、

東京より此の地に行くには東海道鐵道三島驛にて豆相鐵道に乘替へ大仁驛にて下車し、それより人力車あり(賃金二十錢)馬車あり(賃金七錢)、

○湯ヶ島溫泉

由來伊豆の國、溫泉を以て名あり、熱海の如き人に知らるゝこと早くして折角の好溫泉場も俗化して熱鬧の地となり隨て物價も自然低廉ならずといへども獨り湯ヶ島の如きは幽靜閑雅にして靜養をなすに適し物價亦低廉にして風俗敦厚頗る愛すべきものあり、されど地の邊鄙たるの故を以て其名を稱ぶもの甚だ多からざるは惜むべし、

湯ヶ島溫泉は田方郡上狩野にあり、大仁停車場を去ること三里二十町、馬車あり賃金一人廿六錢、人力車なれば一人賃金五十八錢、新

橋大仁間汽車賃金一圓三十二錢、

天城山南に峙ち狩野川、村の中央を貫流し一望すべて綠樹翠草にして居ながら郭公を聞くべく樓上手を延ばして螢を撲つべく其快、蓋し都人士の知らざる處、氣候は極暑といへども八十度を超えず大寒も四十四五度を下るとなし、されば避寒避暑共に好適の地なりとて近來書生の避暑かた〴〵勉强に來るもの多しとかや、旅館落合樓は狩野川に臨み四周樹木鬱蓊し川には釣橋を架し頗る風致に富む、宿料は一晝夜にて並等金三十五錢より四十錢、上等金五十錢より六十錢どす、温泉は鹽類泉にして湧口は西平、世古、木立の三ヶ所に分る、木立は木刀より轉訛せるものにして往昔源頼朝此の地に來り木刀を以て穿ちしに因り其の名ありと傳ふ、此の地の名物は山葵、椎茸にして川魚亦多し、

附近に淨蓮瀧あり上中下の三段をなし最下のもの最も高くして殆んど九十尺あり、

○西平温泉、落合樓の下流數町にあり旅舍を湯本屋とす、

○世古の瀧温泉は西平の南十七町の溪間幽邃の地に在り落合樓の元湯なりといふ、

○吉奈温泉、大仁停車場を下りて本街道二里ばかり南行して右へ一里計入る所にあり温泉宿を豆腐屋といふ閑靜にして避暑によし、

○古奈の温泉、南條停車場より七八町にあり石橋三左衛門といへる宿屋あり宿料四十五錢を通常とす、

○戸田海水浴

戸田は伊豆國田方郡戸田村にあり、新橋より汽車に乘りて沼津停車場にて下車し(汽車賃金三等一圓二十錢)汽船に乘れば一時間にして

達すべし、北方には富士山雲外に聳へ三保の松原、田子の浦目睫の間に見へ風景他の俗境と異り一段閑靜の趣きあり、魚肉の鮮なるあり、鶏卵鶏肉にも事缺くことなし唯俗輩の爲めに歌妓の樂を缺くを憾みとするのみ、されど眞に靜養を望む人には一遊直に仙境の感あるべし、海水浴場は御濱と稱する所にあり旅館は保養館、戸田に遊べる人は序に堂ケ島の洞窟に曳杖せよ、

堂ケ島或は洞ケ島とも書す、仁科村大字濱村にあり昔源頼朝石橋山に敗れ逃れて此處に匿れしと傳ふ奇岩怪石起伏散在し或は洞をなし或は窟をなし其奇觀筆紙につくし難し、編者嘗て雲州高尾の鄕鬼の舌震を觀て其奇を激賞せしは未だ洞ケ島に遊ばざるの昔なりけり、彼は涓々たる溪流に在り、此れは渺々たる大海の岸、其の觀もとより同日の談にあらず、

夕立のはれ行く海の靑さかな　　美綱

伊豆國　湯ケ島溫泉

駿河國

○御殿場

往昔源頼朝公富士の裾野に狩せし時此處に假殿を設け其後德川仁君御茶屋御殿を建設せられしを以て爾來此の地を御殿場と稱せしが明治の世に至り自治制實施の際、名を改めて御厨町となし現今戸數凡そ一千二百餘、人口一萬以上を有し東海道鐵道停車場中最高の地にして海を抽くこと實に一千四百九十八尺、土地乾燥にして空氣新鮮水亦頗る清列なるを以て夏日も蚊を生せず避暑療養には最も適當の地なり、殊に先年當地の醫勝田某氏脚氣病院を設立し東京よりは佐々木氏月に五回出張診察をなすとの事なれば轉地者の爲めには一段の便利なるべし、又た近傍なる文覺上人淨行の瀧といへる瀑布は富

士山より流出つる者にして清冷掬すべく古來之れに浴すれば腦病、脚氣、氣鬱症に効能ありといひ傳へ夏期に至れば來浴者頗る多し、此地は海道筋より富士山に登る要路に當り箱根行き湯の本街道にして交通の便極めて好く東京よりは僅に四時間にして達すべく（汽車賃三等壹圓）名古屋よりは七時間を費して餘あり、魚類の如きは沼津小田原より朝夕電氣鐵道の便により送り來るを以て常に新鮮の味に飽くことを得べし、旅館は不老館富士館最も大なるものにして信用あり主人伊野佐吉仁俠の氣あり獨力富士の新道を開鑿せんが爲め苦心慘憺十年の歲月を費したる程の人なれば其營業上顧客に對する待遇の如き自ら特色あり、當地各旅館一定の宿料は上等金一圓二十錢、中等金七十錢、下等金四十五錢下宿料は上等一ヶ月金十五圓（六畳一人）中等金十二圓（六畳二人組）下等は金九圓（六畳三人組）

近傍に名勝古跡頗る多し今其重なるものを擧ぐれば、

金時山、阪田金時の生れし處有名なる金時誕生石はこゝにあり、足柄越、上下三里の峠にして嶺に足柄神社あり、空海自彫の額を藏む宗行卿墳墓、鎌倉より護送の途次相澤の里にて逝去せるをこゝに葬る

御胎内、御殿場より一里二十町登山道より二十町おぎはらといへる原野にあり形子宮の如き岩窟にして之れに入るを胎内廻といふ此の胎内廻をなしたる人の襷を以て懷胎婦人の腹帶となせば安産すと傳ふ、其他御殿場八景なるものあり面白ければ左に掲げつ、

金時山の月、　金時も山を下るか此の月に

駕坂の時雨、　坂の名を駕に見て越す時雨かな

嶽の下夕照、　嶽に入る夕日いらめく橋の下

八重山の霞、　七重八重山も霞の靜かな

永原の夜雨、　永原や往來も絶えて夜の雨

田中の落雁、　おのが蔭見てか田中に落る雁

足柄の暮雪、　足柄のつかれも踏むや暮の雪

大野原青嵐、　富士晴て裾野あはれや青嵐

○富　士　山

富士山の靈峯たることは誰も知るところなれば今更其の形容など菅々しく言はで直ちに登山の御案内仕るべし、嘗て野中至氏此の頂上に冬籠りを企てしより一萬二千四百尺の高嶺も今は冬さへ登山し得ざるにあらざる事を知りしかど通常は毎年舊暦六月一日の山開きより登山するを一般とす、其の登り口は古來三ヶ所ありて第一を富士大宮表口とし第二を北口舊吉田とし第三を東口須走と稱せしが何れも峻嶮にして登行甚だ困難なるを以て非常の强壯者に

あらざれば登山する事を得ざりしが當地の人伊野佐吉氏之れを遺憾とし明治十六年自費を抛ちて東表口なる新道を開鑿せり、爾來太郎坊まで人力車を通じ二合目まで駄馬を通ずるに至れり、又駕籠を雇へば（人足六人を要す）一歩の勞を煩はさずして登降自由なり、而して東京及び海道筋より登山するには實に此の東表口新道を以て順路とす、偖て此の道より登山せんとする人は御殿場に下車し旅館に入りて登山の支度をなすべし、旅館は登山者の爲めに萬事の周旋をなす即ち剛力人足を倩ふこと（客四人一組にて剛力一人とし若し荷物多きとき増人足をなす）辨當、笠、着衆座、杖、褞袍（とて）、草鞋（草鞋は一人に付き五足を要す）其他毛布の類を準備すること總て旅館に聞き合せて手落ちなき樣にすべし、準備の費用は年に依りて相異あり必ずしも一定せざれども今御殿場の旅館不老館富士屋より本年の

確定せるものなりとて報告せるところに依れば左の如し、

剛力人足雇賃、登山二日掛にて金七十五錢　但食料は客持

褞袍貸賃一人前金二十錢、

草鞋一足金三錢　笠莫蓙金二十錢

杖一本　金十錢　此れは太郎坊にて賣る

山辨當　金十二錢より十五錢其他客の好に應ず、

駕籠は人足六人にて登降賃金二十五圓也（三日を要す）

茲に登山の準備整へば此れより先きは一に剛力の案内に委かせ編者は只其大畧を一と通記載することゝせん、

御殿場より一の小屋まで三里道路平坦にして殆んど一直線をなす人力車賃金八十錢の定めなれども大低二人挽きを例とするが故に賃金一圓三四十錢を要すべし、若しまた乘馬にすれば御殿場より太郎坊

まで三里十二町の間駄賃金六十錢、二合目までは金八十五錢なり、太郎坊より數町、登れば一面の燒原にしてたゞ處々に雜草の點々たるを見るのみ、一合目より九合目に至るまで一合目毎に石室の休泊所あり此處にて休憩して麓の方を眺むれば實に得も言はれぬ景色にして登阪の困難も忘るゝばかりなり、但し歩行中は只足もとをのみ見て登るべし決して四方を見廻すべからず山に醉ふの慮あればなり、四方の處を眺望せんと欲する時は必らず休憩すべし、七八合目にて謂ゆる御來光なるものを拜すべし是れ拂曉、日輪の大洋より昇天する光影にして即ち俚俗に謂ふ處の三躰の彌陀是なり、其奇觀なること蓋し下界に於ては想像にだも及ばざる處なるべし信者が之れを拜して感涙にむせぶも寔に無理ならぬ事ぞかし、

六合目より寶永山の裏手へ這入る道あり、之れ富士山の裏面へ廻りて一周するものにして中道廻りと謂ふ途中に一泊して二日を要す、旅客若し此道をまはらんと欲せば豫め長き杖を準備すること必要なり、

八合目より數町にして大たるみあり所謂千古の雪は此處にて喫むことを得べしそれより登山中第一の難所なる胸突八町に到る疊々たる巨岩突兀として亂れ立ち（卷頭寫眞參觀）賽の河原の傍に湧き出づる銀明水は白山嶽の麓にある金明水と一對にして登山者の是非一掬せざるべからざる靈水なり、それより銅馬堂の古跡を訪ひ堂の段を登れば絶頂劒ヶ嶽に達す淺間神社の奥の宮は此處に在り、良香朝臣の富士山記の石碑、又去る明治三十一年岡山縣の吾竹先生が建設せられし鎭國山の銅碑あり、舊噴火坑さては芙蓉の謂れなど剛力の朴訥なる說明を聞き終れば登山者は是非とも野中氏冬籠りの跡を訪ふて

彼れが壯圖を賛稱せよ

下山するには銀明水の傍らより以前通りし胸突、七合目より須走へ入り大だるみを經てすなばしりに到るべし此のすなばしりを降れば一時間も費さずして二合目に達することを得、

寶水山のことに付き神澤其蜩の面白き記文あり左に掲げて讀者の一覽に供せん、

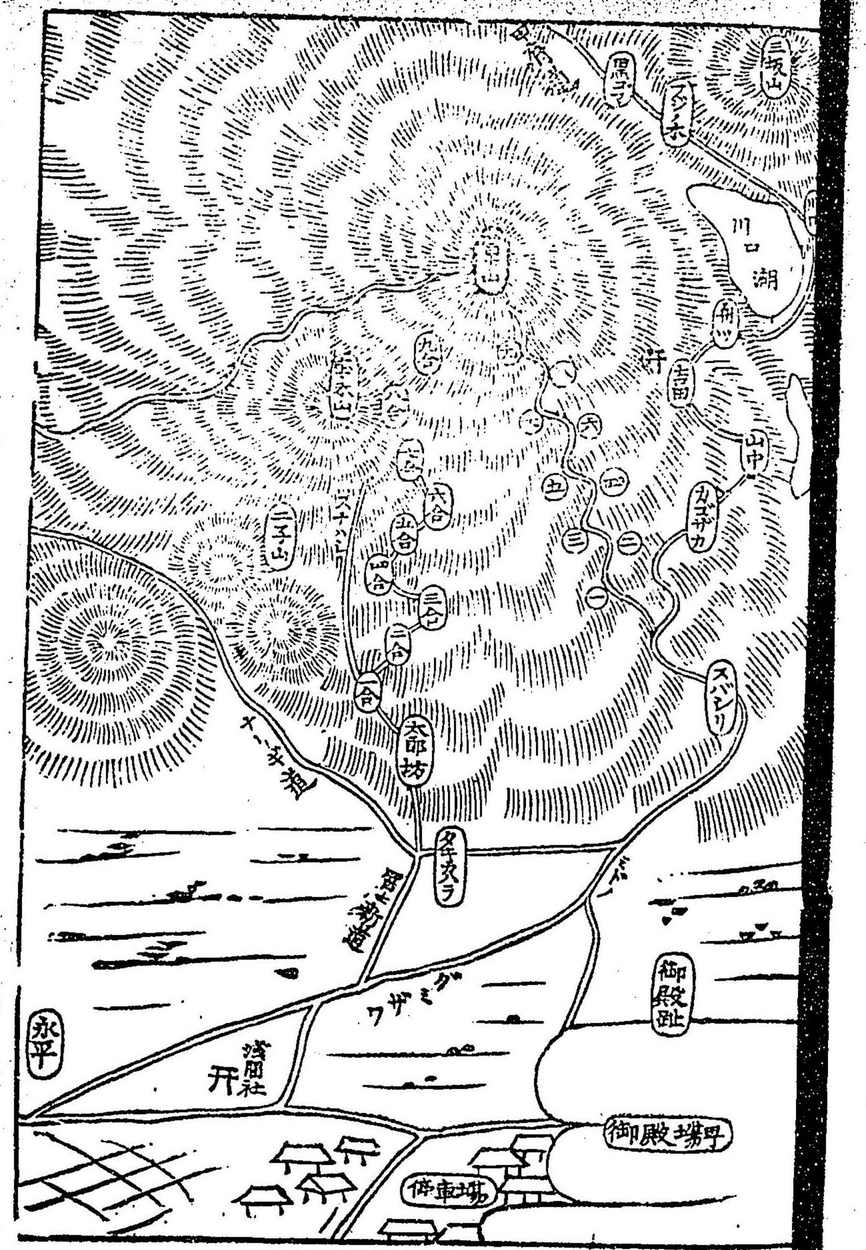
寶永四年十一月二十日頃より、江戸中寒氣甚だしく、一天かき曇りて朦朧たりしに、同二十三日、午の刻時分、いづくともなく震動し、雷鳴頻りにて、西より南へ、墨を塗りたる如き、黑雲靉靆其の間より、夕陽移りて、物すさまじく、晝八ッ時より、鼠色なる灰を降らしぬ、諸人魂を消して惑ひしに、老人の申しけるは此の三十八九年以前、かやうの事ありたり、是は定めて、信濃の淺

間山の、燒け出でしならんと云ひしかば、諸人すこし心を取直しぬ、夜に入るに隨ひて、灰彌々强く降りしきり、後には黑き砂大夕立の如く降り來て、終夜震動し、戸障子なども響き裂け、物の相色も見えわかねば、晝夜を分かたず、家々に燈をともし、往來の人も絶へ果てぬ、適々通行する人は、此砂にふれて目くるめき怪我などせしもありとかや、諸人如何なる故とも知らず、されば世の滅ぶるにやと、女童などは啼きさけびしに翌日に及び富士山燒け候よし注進ありき

昨二十二日晝八ッ時より今二十三日までの間地震間も無之卅度程ゆり、民家夥しくつぶれ申候、扨廿三日晝四つ時より富士山夥しく鳴きいで富士郡中一面に響き渡り男女絶へ入りしもの多候へども死人は無御座候然る處山上より煙夥しく渦卷出で山大

地共に鳴渡り、富士郡中一面に煙巻き候故いか樣の譯とも不相知人々十方を失ひ罷仕候ひけるうちは煙ばかり相見え候處、夜に入り候へば一遍に火焔に相成り候以後いか樣に相成候哉不奉存先右燒出での節不取敢御注進の爲罷越し候故委細の儀は跡より追々可申上由

右注進の後、彌々火氣熾になり砂石爍を吹き飛し、近國廿里四方へ砂石を降らせ、中にも伊豆、相模、駿河は所によりて二丈餘を降積り堂社民屋も埋れ田畑の荒あげてかぞへがたし、日を經て稍燒鎭りぬ、其土砂を吹き出し〻所、穴となり其穴の口に大なる山を生ず、世俗呼んで寶永山と號す、街路の方より眺むれば右の半腹に彼の山出來て、瘤の如し、さばかり無双の名山に此時少し瑕のいでしこそ恨みなれ



夏日東海道中望富士山作　　加茂　眞淵

いそまより、そがひに見ゆる駿河の海、沖津なみ路はせまきかな、ふりさけ見ればさかみれの、八重山みれば低きかも、天の原なる富士の根の、麓を出て〻風のまに横ほる雲にするかの海、沖もかくろひ相模嶺のみれも雨ふり時の間に、神もなりゆけと六月の照る日の空にあらはれて。くもるともなくさこ夏に雪ぞふりける富士の高根は

返歌二首

駿河なるふしの高根はいかつちの
おとする雲の上にこそ見れ

不二の根のふもとを出て〻行く雲は
あしから山の峯にかゝれり

○牛臥海水浴

沼津に下車して南行し更に右折して瀑橋を渡り（狩野川に架す）更に進めば海岸に牛の臥せるが如き丘陵のあるを見るべし牛臥山といふ、所謂牛臥海水浴場は其の麓にあり、靜浦の碧を擁して牛臥の翠を負ひ、伊豆の大瀬を左にし、右に三保の松原を招き、海上には高島、瓜島の奇巖突起して風致を添へ、御料の森林、東海濱に蒼々として相續き風景極めて好し（卷頭の寫眞參觀）加ふるに海邊浪靜かにして水清く毫も虫害の憂なく空氣亦新鮮にして極暑も八十五六度を昇ることなく、嚴冬なほ四十度を降らず寔に好個の療養地なりとす、近傍には、東宮殿下御用邸をはじめとし西鄕、大山兩侯川村、大木兩伯其他華族、豪商等の別墅多し旅館を三島館と號し舊本陣の世古六太夫なる人の所有にかゝる海岸には數棟の別館を建築し、各

棟皆浴室、厨を設け又邸内には砂浴場、納涼所の設あり、一昨三十二年牛臥山は三島館主の有に歸せしより全山を擧げて運動場にあて山上に休憩所を設く、登臨すれば富士大山の諸山來りて眸底に收り田子、三保の絶景手にとる如く其風光の明媚なること紙筆に盡し難し、また海岸の岩石自然の池をなせる處を釣池と名く、蓋し短棹長竿の遊びに適す、三島館は和洋の料理、客の好みに應じて調進す、魚類は此内浦にて獲たるものにして其新鮮なるは謂ふまでもなし、名物に松露水煮あり桃郷の桃また味よし旅客求めんとならば旅館へ命ぜよ格好の家づとなり、

○我入道海水浴

沼津を距る南二十町餘牛臥山を距る北三町にして狩野川の河口にあり、西北には田子の浦三保の松原を望み北には富士の雲外に屹立するあり海を隔てゝ大瀬崎、眞城山を見、なべての景色牛臥に似たり、旅館を松風館といふ、

○靜浦海水浴

靜浦海水浴は牛臥の南靜浦字志下にあり、伊豆の大瀬崎と駿河の三保ケ崎と相擁して一灣をなす、白沙は長く續きて、御用邸の青松と相映し風光頗る妙、海水浴旅館保養館といふ

山本の松の下みち日は入りて馬ひくしづが影急ぐなり　（昌　綱）

○靜　岡

東海道を通行するものは一度此驛にて下車し疲勞を休めて後又乘續くるもの多し、さればこゝに先一泊するものとして此近傍の勝地二三を紹介すべし、

淺間（せんげん）神社は國幣小社にして安倍郡賤機山の麓にあり、靜岡停車場よ

り十六町にして神部神社、淺間神社、大歳御祖神社の三社及鄕社麓山神社、其他を一境内に鎭坐せり世間之を總稱して淺間神社といふ社殿莊嚴、老杉古松あたりを包み一段神威の尊さを添ふ社は醍醐天皇の敕願により延喜元年、大宮淺間神社より御分靈を勸請す故に富士新宮とも云へり、祭神は木之花開耶姫命、御相殿は瓊々岐尊、栲幡千々姫命なり、當社は安永二年火災に罹り一朝烏有に歸せしが享和二年松平信濃守幕命を奉じ再建に着手し天保十四年に至り又舊時の盛觀に復せり、

境内は廣く面積一萬餘坪と稱せられ四邊老樹翁鬱として神々しして又櫻花の名所にして陽春三月の頃は爛熳として一層の眺めあり、明治初年頃は社領を上地とし且つ境内を公園地に編入せられしも明治二十五年公園を廢し更に神社の有に歸す、

淺間神社の扁額は欅一枚板、子育獅子の透し彫りにて正二位、三條西季公の書にかゝり神殿は黑塗垂木は三重にて端に皆菊の紋あり、屋根下及蔀中は孰れも金箔彫刻にて松に鶴、同孔雀等奇刻を以て滿つ就中飛驛の甚五郎作粟穗に鶉は有名のものなり、其他大拜殿、繪馬堂、舞殿、等見るべきもの多し、

靜岡公園は奈吾屋神社の傍にあり、園内大池あり鏡の池といふ、水清うして池底の鯉魚赤黑相交り浮游せる樣眞に愛すべし、周圍巨松喬杉櫻樹等繁茂し其他藤花夥しく其時節に至れば紫のゆかりの色濃く池を涉りて橋あり行數十步にして登山の道あり中にして則山神社あり夫より左折又右曲羊腸として登り易からされ共一度頂上に達すれば四顧洞達後法性寺入道の歌に「今朝見れば霞の衣をかりけて賤機山に春は來にけり」と讃めるもこゝなり、瞰下せば靜岡市街は一眸

の裡に集り人家櫛比行人絡繹たりこゝに於て初めて當市の盛旺を知るべし、右の方に見ゆる宏壯なる堂宇は寶台院にして越て一叢の深林あり是ぞ名にしおふ岩清水の八幡宮とは知られける左に見ゆるは清水港にして船舶の輻輳せるを望むべし、又富士の高根は巍然として大空に懸り函山鷲鷹山は恰も足下に拜伏するに似たり、

駿府城は市の北隅にありて湟濠を繞らし廣袤各六丁餘面積五十町歩あり、古の天主閣は七層にして頗る壯觀なりしと聞けども今はなし、本城の創築は詳ならずと雖ども德川家康駿州を平定し、天正十四年中之に城たりしといふ、

寶台院は魚町にあり淨土宗の古刹にして金米山龍泉寺と稱す、永正三年、僧佐崇柚木村に創建し後ち紺屋町に移す、天正十七年家康公の愛妾西鄕の局を葬る寛永五年に後水尾天皇勅して寶台院の法號を

賜ひ、因て寺を現地に移し寶台院と名け德川氏の廟堂となる、本尊は彌陀三尊を安置す、大書院には家康公持念佛白本尊を安す、本堂東測に廟堂あり之れ局の廟なり內には金銀珠玉を鏤めたる靈牌靈佛及物具あり金色燦然として眩せんとす、往時は寺領三百石を有し紫衣の僧格なりしといふ、

又院內には二十七八年日淸戰役に名譽の戰死を遂げたる縣下出身の將校以下百餘名の彫像あり、常に衆庶の參拜絶ゆることなし、此外見るべきものは夥多あり

小梳神社、不動尊、圓山趾、今川義元廟、臨濟寺、龍爪山、草薙神社、姥ヶ池、八幡社、久能山東照宮、羽衣松、及吐月峯等一訪の價値あり、

旅館は淸水館、樓陽館、大東館を大なりとす就中淸水館は客室淸潔

にて取扱亦叮嚀なりとの評あり殊に其の二階坐敷よりは寢なから富嶽を望み前面には小梳神社の庭園を扣へて頗る眺望に富む、本年一月靜岡新聞社が縣下に於ける旅館の投票を行ひし時に一等旅館の當選を得しは實に此の館なり、今清水館の宿料を聞くに一泊通常六十錢、上等一圓にして晝食料は二十五錢とす、但七十錢以上の宿泊者には總て絹布夜具を供すといふ、

名物としては漆器、竹細工、茶、紙、山葵漬等あり、

○清見潟海水浴

清見潟海水浴は興津の西七町を距る清見寺前の海岸にあり、此地は古へより風景の好きを以て有名なる所にして名を聞きてさへ早や清涼を感ず、藤原實枝は記して曰く、

清見の勝景は天下の奇絶なり、馬を走らしむるものはくつばみを

委し楫を鼓するものは棹を忘れ徒より行くものは十歩に九度目をうつす誠に八湘を卷て一望の中にをさむるごとし、

淺井了意は其風景を寫して曰く、

風景まことにたぐひなく眺望ひとへにあまりあり左に望めば海水ひろくたゝへて眼は雲の涙にまこひ右に顧みれは長山そびえつゝきて耳は松の風にすさまじ釣する海士の夜もすがら波にきえざるかゞり火は世渡る人のならひひとてうきつ沈みつ漕ぎめぐる

東は海を隔てゝ伊豆の諸山を望み西は久能山賤機山あり南は三保の松原にして北は富岳聳ゆ嗚呼是れ好個の畫圖、

海水浴場は此のあたりの水清く波穩かなる所に設け天然の岩石を以て障壁となせるを以て危險の恐れなく婦人小兒も尚悠々浴を取るべし、

清見寺は興津町大字清見寺にあり、秋島離島の東海道名所圖繪に曰く

之れ此禪刹は世に名高く前に江海渺々として清月禪心を照し後には山嶺巍々として啼鳥鐘聲に和し祖堂の四君樹は朝鮮木にして四時に結ぶ其花形毎々に變はれる故花の名あり臥龍梅は客殿の前にありて枝の流れ丈餘尺其側に垂綠梅あり早春の頃は芬々として羅浮の夢に雪芳しうして拂へども去らず壽陽公主の粧あり書院の庭中には九段に落る飛泉ありこれを九曲泉と名く庭の前の牛石虎石龜石は其形によつて銘するなり什寶は國初將軍家の鑾輿清見夕關の兵器四品あり扒頭抓子棒鋏眉刀尖刀などの頭なり其外寶器かずかずあり常に清見寺の鐘を聞しと三井の狂女が諷ふ鐘樓も庫裏の前にあり此門前は則東海道にして賑はしく卿相雲客萬國の諸侯多

くは此寺に駕を停て詩を賦し歌を詠するもあり茶店の前栽は皆鹽濱にして汐汲汐漉鹽竈のけぶりいと寂々として風流なりこゝはむかしより月の名所にして須磨明石にならびたる勝色なり謝莊が月の賦に、白露空に曖き素月天に流る、と賛せしは此ほとりのことなるべし、

此寺は禪宗にして浮見長者の開基に係り久しく廢寺となりしを足利尊氏將軍たりしころ再興せり、惜哉本年三月十六日祝融の災に罹り全寺燒失し東海の名物たりし同寺も終に又見るべからず、寺門のある所は古の清見夕關の址なりといふ、此地にも名稱舊跡少なからず、旅館のおもなるものを一碧樓、佐野屋、身延樓、龜島屋、東海ホテル、千歳屋等とす、

宿料は六十錢より一圓二三十錢まで、料理は和洋ともに好みに應ず

駿河國　清見潟海水浴

べし、

東京新橋發滊車にて午前七時二十五分に出立すれば午後一時三十五分に興津停車場に着すべし、(汽車賃一圓四十九錢)停車場より海水浴場まで人力車賃八錢、

不鎖關門俗吏生、　只能令勝境留行、
暮雲埋泉有遺恨、　清見寺中鐘一聲、　(澤庵)

○久能山

久能山は駿河國有渡郡にあり靜岡市を距る一里二十九町馬車は往復にて金三十錢片道二十錢人力車は往復五十錢片道金三十錢、

山は海面を抽くこと八百九十尺なれどもはてしなき大平洋に臨み富士山の屹立するを見るのみにて既に心氣豁然たるべきに清見潟三保の松原など眼下に見ゆるに至りては其快言ふべからず、

山巔に久能神社あり元和三年の創立にして德川家康を祭る、敕額御門神廟唐門鼓樓神樂殿あり、

旅館は石橋、石垣、豆腐屋等にして又德音院にて室を貸して宿せしむといふ、

○志太鑛泉

藤枝在にあり里人よんで鹽湯が谷といふ、鑛泉は無色清澄にして異臭なく强鹹味を有し、反應は强亞爾加里性を徵す(愛岐震災後鑛泉は分量を增加せり)今其の定量分析の成蹟を見るに鑛泉分類上沃度含有の亞爾加里食鹽泉に屬し浴用としては濕疹、腺病、勝胱加答兒內用としては慢性胃加答兒、腺病、慢性子宮病に効あり但內用は三倍の水を加へ稀釋して用ゐべしとなり、此地は新開地にして其名未だ高からずといへども閑靜を好む人には適當なる避暑地なり、溫泉

宿潮生館の外は農家のみにして戸數僅に十五六戸此地に行くには藤枝停車場にて下車し(新橋藤枝間瀛車賃一圓七十三錢)藤枝停車場より潮生館まで二十町車賃十錢より十五六錢まで、宿料は五十錢六十錢七十錢、の定なり、近傍の神代塚、人穴、烏帽子岩など散策をこゝろむるに適す、

遠江國

○舞阪海水浴

舞阪海水浴は遠江濱名湖口なる辨天島にあり、南は大洋に面し、西北は濱名湖に抱かれ遙に信飛の連山を望み、東は富士の高根を仰ぎ其風光の絶佳なること筆紙のよく盡し得べきにあらず、濱名橋やゝ破損の個處ありと雖ども其美觀未だ衰へず、礫辨天の明媚、今切口の奇景亦皆一訪を煩すに足る、若し夫れ館山寺の勝に至りては林鶴梁先生の、

石壁峭立、壁盡れば即ち江、水光滉漾、天と一碧、嵐光滴々、山影倒に浸す、天然の畫圖董巨の妙筆と雖ども得て彷彿する處にあらず、

遠江國　舞阪海水浴

と激賞せるあり亦以て其一般を想像すべし海は遠淺にして波靜かに水清きが故に婦女子といへども危險の虞なし、蓋し海水浴場として多く得易からざるの地といふべし、聞く毎月四回海底の掃除を行ふ由、旅館は現今七戸あり其辨天島内にあるものを茗荷屋支店、伊勢屋支店、中村樓、松月樓及開春樓とし島外のものは濱名館及東洋館等にして茗荷屋支店は天高氣清樓と稱し島の東端にあり伊勢屋支店は如水樓と稱し之に隣り其西部にあるを開明樓とし中央のものを松月とす亦其東隣は中村樓にして濱名館、東洋館は橋の東端即ち舞阪町の西端にあり共に明治三十三年の新築又は改築增築せしものにて何れも清洒なり尙各自土地の繁榮を企圖せるが爲一般客扱に勉强注意せり

濱名湖邊の古跡には、宗良親王の古城趾たる伊井谷の宮、皇子無門

禪師の開基たる奥山方廣寺、三方ヶ原の古戰場等あり、

新橋より舞阪停車場まで滊車賃二圓十九錢、停車場より辨天島まで十六町、馬車賃六錢、人力車は十錢の定めなり、宿料は下等五十錢上等七十錢、晝飯下等二十二錢、上等三十錢、其他は客の好みに應じて多少の差異あるべしとなり、若し舟遊を試みんと欲せば旅館に於て舟の用意をなすべし、釣船一艘一圓、網船一艘一圓二十錢、屋根船一艘一圓五十錢(皆舟子雇賃を含む)

松翠砂明別微郷、　四來遊客日加忙
江山秋氣皆鍾此、　變爲人間救恙場、　(松　鶴)

涼しさや海と湖とを前うしろ　(十　湖)

○氣賀海水浴

氣賀海水浴場は濱名湖の東北風景絶佳の地を占む、引佐の細江に臨

めるを以て海水極めて穩なり、濱松を距ること四里、乘合馬車あり旅舍を吉野屋と云ふ、こゝより舞阪へ遊ぶには小舟を雇ふて湖中の風光を觀ながら二時間ばかりにして達すべし舟賃八十錢位、宿料は舞阪と大差なし、

○鷲津海水浴

鷲津海水浴場は濱名湖の西岸鷲津停車場の在る所にあり、其眺望舞阪に及ぶへくもあらねど決して氣賀には讓らず、旅館の名あるものを濱名館とす、宿料はまた舞阪氣賀と大差なし、

○秋葉神社

遠州周智郡犬居村字領家秋葉山上にあり祭神は軻遇突智神(アグツチ)にして曾て武田氏の爲めに焚かれたるも猛火の中獨り秋葉神社を存せしにより世人鎭火の神として崇敬せり、境内は一萬八千餘坪ありて、樓門

を入れは左右に無數の燈籠あり、大華表を過ぎ石階を上れば唐門、權殿、拜殿、神饌殿及本社等あり、社務所は華表の前にありて共に頗る壯嚴なり、又四邊には老松古杉森々として天を摩し、自ら神威を隆め土地幽邃閑雅にして時に異禽の鳴くを聞くの外寂寞として聲なし、前は即ち斷崖削立して潺湲たる溪流を臨み避暑地として頗る好適の地なり

抑も當山は元大登山秋葉寺と稱し、養老年間行基菩薩の開基にかゝり、禪宗の巨刹にして秋葉三尺坊とて世に名高かりしが明治六年三尺坊を可睡齋(佐野郡久努西村大字久能)に遷し同時に縣社に列せらる、毎年十二月十五日、大祭を執行し火災防護の祈禱を行ひ翌十六日には神輿の渡御ありて此兩日には近國近在より參詣するもの夥し、順路は掛川停車場にて下車し(新橋より三等賃金一圓九十錢

錢)、夫より中遠馬車組合なるものあり、之に搭せば十五錢にて森町に達すべし、森町よりは三倉、阪下の諸村を經てこゝより凡そ五十町の阪路を登らざる可からず、森町よりの途中道稍嶮にして腕車通せず徒歩又は駕籠を雇ふより外詮なきも此間約六里許りの道なれば健脚を以て誇る人は須らく徒歩して此沿道の好景に目を嬉はすべし、

三河國

○蒲郡海水浴

蒲郡海水浴は蒲郡停車場を距ること僅に二町。東北西の三面は翠巒を負ひ、南方は渥美灣に面し碧波渺々たる間に竹島、大島、小島、佛島等の島嶼散在し、海岸には所謂戀の松原あり。森々たる青松白沙に映じて十餘町に續く、凉ヶ森其西端に連り、山紫水明の美宛然畫の如し、殊に海水、清くして波、靜なれば更に危險の處なくまことに三河第一の海水浴場たるの名空しからずといふべし、

竹生島の辨財天は往昔藤原俊成卿の勸請せられしものにして日本七辨天の一なりと傳ふ、

旅館は健碧館を第一とし、海月樓、海老屋、岩龜亭、常盤亭、之れ

に次ぐ、健碧館は海水を館内に導き四時温浴の設けあり、近來客室を増築し、且貸別莊をも新築し勉めて改良を計れり、大磯あたりの俗化を厭ふ人は試みに曳杖せよ、入江の船遊びなどは、また格別なるものなり、健碧館の宿料は普通五十錢、中等八十錢、上等一圓なり、名物には海鼠腸、もづく、魚煎餅等あり土産物として躰裁よし近傍には臥龍の松、幾代の岩、阪本の瀧等遊覽すべき處少なからず、東京新橋午前六時二十分發の急行列車に搭ずれば、午後三時三分には蒲郡停車場に着すべし、賃金二圓四十九錢、

大島や小島がさきの佛島、涼がの杜に戀の松原　（俊　成）

○伊良湖岬

三河國渥美郡の海に突出せる所を伊良湖岬といふ、尾張の師崎と相對して一灣をなす、伊良湖村一小漁村にして高丘あり、登れば四方を見るべく頗る眺望に富む、即ち答志、神、の二島を隔てゝ志摩の朝熊山を見る衣ヶ浦には篠島、日間加島、佐久の島の散在せるを認む、東には三保の松原に似たる松原あり、若し夫れ戀路ヶ浦に至りては奇の奇なるものあり、骨山といふに牛ヶ首の岩あり、二大門あり て高さ十餘丈、中に洞穴あり浪怒れば轟々として入つて鳴る、此の地好景の目を嬉むるもの斯の如く多きも一旅館の泊すべきなく遊ぶ者の遺憾とする所なれども漁家寺院等に頼りて一夜の情に預り田舍者の手料理に村釀を酌むも亦一興ならん、

東京より赴かんには新橋より豊橋（三等賃金二圓三十七錢）まで汽車に乘り同所より牟呂まで人力車を驅り牟呂より船に乘りて畠村に着せば僅に二里にして伊良湖に至る、

○前芝海水浴

豐橋停車場の西一里三十町を距る前芝村にあり、東南は海に臨みて白帆の走るさま漁舟の翻々たる手に取るが如し、西の峰巒は或は起ち或は伏し或は遠く或は近くして、天然の風景双眸の中に集る、此の地には豐海亭といへる海水浴旅館ありしが先年洪水の爲めに流失し今なほ再築の運びに至らず、

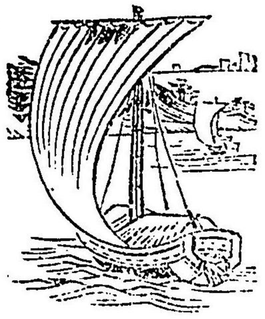
○豐川稲荷

豐川停車場を距る二町の處にして新橋よりすれば豐橋驛にて乘替へ豐川鐵道によるべし、(新橋より豐橋迄三等賃金二圓三十七錢豐橋より豐川迄十一錢) 稲荷は豐川村の妙嚴寺の境内にあり、堂宇壯麗輪奐の美を盡し結構神社に擬す祭る處の本體は吒枳尼天にして俗に言ふ稲荷にあらずとか聞く、四時遠近より賽するもの祈禱を乞ふもの陸續踵を接し其盛なること下總の成田不動、及び讃岐の琴平神社と

併び稱せらる、

○長篠古戰場

豐川鐵道の終點たる大海驛にて下車し (吉田より一時十五分間にて三等賃金三十三錢) 行く事十町の處にあり、此地天正三年武田勝頼長篠城を陷れんとし織田德川兩軍と激戰して大敗を取りし歷史上著名の古戰場にして城墟猶存し、驍將勇士の古墳所々に散在し吊古の客をして坐ろに當年の事を追懷せしむ



尾張國

○大野海水浴

大野海水浴場は知多半島の西岸、風景絶佳の地にあり、有名なる海音寺の藥師如來は往昔この海中より出現せるものなりと傳ふ、其如來緣起によれば、人皇九十七代光嚴天皇の御宇すなはち元弘年間この地の海水に浴して病を治せしものなりけり是蓋し我邦海水浴の嚆矢なるべしと、

旅館は海濱館、恩波館を重なるものとす、宿料は三十五錢より五十錢までにして別に席貸もなすといふ、

最近の停車場は半田町にして里程三里、人力車賃三十錢なり、また熱田海岸より毎日午前八時汽船の出帆あり、賃錢十六錢、僅に一時

三十分にして達すべし、名物には大野味噌、一口香鯛の力煮、よしの煎餅、ふとるづく等あり、近傍遊歩によきは前記海音寺境内及び知多御坊なりとす、

鏡如大月上蒼端、　十里平沙望一殺、
不識城中炎熱苦、　恩波深處夏尚寒、　（國　貞）

○師崎海水浴

師崎は尾張國知多郡半島の極端にありて三河の伊良湖崎に對し西南は伊勢志摩の峰巒を見、東は遥に富士山を望み、前には松島、シノ嶋、ヒカマ嶋、サケ島等の群嶋散點して風光甚だ佳なり、

山路よりけふは磯邊の里に來てうら珍らしき旅衣哉　（宗良　親王）
海山のあかぬ景色のある上に富士の根をさへけふ見つる哉　（和　雄）
雨霽朝暾射海洋、蓮峰八朶玉容新、煙波莫道佛寶遠、天際一方望美人、（半　村）

尾張國　大野海水浴、師崎海水浴

是皆此の地を詠せるもの殊に海水清潔波靜穩、浴場としては實に好適の地といふべし、(口繪寫眞參見)されば近年岐阜、名古屋、西京地方より來遊するもの頗る多く夏時は常に浴客を以て滿さる、旅館は養春館、見晴し、土屋、みどりや、中川屋、林屋等何れも信用あるものなり、産物は魚類を重なるものとす、鯛は殊に名産として數へらる

此地に赴く人は東海線大府停車場にて乘替へ武豐に下車し(大府武豐間汽車賃三等十八錢)それより南の方五里、車の便あり、

師崎の西一里に豐濱海水浴場あり旅舍を大西屋、梅屋といふ、

美濃國

○養老の瀧

養老の瀧は多藝郡白石村養老山中にあり、大垣驛にて下車し(新橋より汽車賃金三等三圓五錢)西南に行くと凡三里(此人力車賃金片道六十錢往復壹圓)道路起伏多くして稍困難なり、白石村を過ぐれば旅館豆馬亭あり、こゝに手荷物を預け、一休みして後ゆる〳〵見物すべし、これより路程十二町老樹生ひ茂り晝猶小暗き中を行けば驚て潺湲として流るゝ溪流あり、之を岩傳ひに渡れば瀧は轟轟として響き耳もしひん許りなり、高さ九十尺巾九尺に餘り、懸崖より轟下する樣人をして思はす快哉を絶呼せしむ、瀧壺は甚だ淺くして膝の節にも及ばす、しかも一枚岩にて危險少なければ盛夏の候に至ら

は婦女小兒抔の瀧壺に入るもの多し、眞に避暑の好適地なり、
瀧の下に茶店二三あり觀瀑によし、此邊楓樹多く晩秋の候に至れば
江於の錦又一層の眺めありといふ、
此瀧の古事は世に名高く、こゝに說出す必要あらざるべし、
さて養老神社は瀧より數丁にしてあり、境内廣し、池あり中より噴
出するを菊水と名付く、水清冽にして水晶の如く一掬せば暑を忘る
に足るべし、旅館としては前記の豆馬亭の外に掬水樓あり、共に清
洒なり、宿料は七十錢位なり、賣茶素心庵あり是亦此地の一名物と
して名高し、

むかしより名にし流れて老人の齡をつなく瀧の白糸、　知紀

○長良川の鵜飼

養老の瀧及此長良川の鵜飼を稱して美濃の二奇觀といふ、抑も長良

川は一名藍見川ともいひ、源を郡上郡大日ケ嶽に發し武儀郡を經て
市に入りて長良の稱あり、水清らかにして澄みわたり香魚を産す、
毎年五月十一日より鵜飼を開始し十月十日を以て終る、常に暗夜を
トし之を行ふ、故に毎月上弦の夜は月の入るを待ち下弦の夜は月の
出でざるに先だちて舟を艤し、流を溯り又下る、鵜船は五艘七艘一
團となり一艘毎に篝火一つを點す、遠く之を望めば夥多の火光水に
映し頗る奇觀たり、一艘の船には篙士四人を載せ一人は船軸にあり
て鵜十二羽を使ひ一人は中央にありて同じく四羽を使ふ、而して後
の二人は楫を取り又は呑みたる魚を吐かしむ、先魚の篝火を望んで
集り來るを見て縛りおきたる鵜を一時に水中に放ち、舷を亂打し聲
を揚げて之を勵ませば鵜は之に力を得て波中に躍りこみ浮きつ沈み
つ魚を追ひつめ、而して之を呑む凡七八尾の啣めるを見て引上げ籠

中に其を吐かしむ、斯くすると凡三時間此間捕ふる處の數最も獵の少なき時と雖も又千尾を下らすといふ、其舟子の鵜を操縱することの巧妙自在なる寧ろ驚くに堪へたるものあり、

此鵜飼の事たる最も古く延喜の頃美濃國守藤原利仁勅を奉して捕魚を禁廚に献せしより初まり、近來は夏期來り見るもの頗る多く、旅館として玉井屋、小橋屋、津の國屋あり外に料亭を兼ねたる水琴樓、十八樓、松畔樓等あり、總て來遊者の便を謀り斯遊に就て一切の周旋をなしくるゝものとす、先此一遊一夜に要する費は元より舟の大小美醜によりて異なれ共先三四人一團となりて見物せば二圓もあらば足りぬべし、猶近來鵜飼游船會社なるもの設立せり直接に就て雇ふもよし、前記旅館の宿料は上等一圓五十錢より五十錢位迄あり、新橋より岐阜驛迄汽車賃三等にして是又二圓九十七錢、

因にいふ本年は四月二十六日縣令を以て例年より十日間を早め鮎漁解禁の旨を發令せられたり、猶本年は鮎魚の發生夥しく來遊の人は此好期を逸すべからす、

面白うてやがてかなしき鵜舟かな　（芭蕉）

うかひ火や魚の心も夏の虫　（北枝）

うづかひよわかきは人の日にたゝず　（信德）

水清し潮のさゝやけし吾齡

常にもかもなみに過さむ　（信網）

美濃國　長良川の鵜飼

近江國

○大　津

東海道鐵道の馬場驛のある處にして、近江八景を見んとする者は、この處にて下車すべし、例により此近傍の勝地を畧記すべし、(新橋より三等賃金三圓五十四錢)、

義仲寺は馬場の東別保にあり、本曾義仲壽永三年粟津の原にて流矢に中り、戰死せしを此地に葬る、謚號を德音院義山大居士といふ、義仲の墳に並びて俳道の祖松尾芭蕉の墓あり、塚に『木曾殿と脊中合せの寒さ哉』なる句を刻す、又傍に祠堂ありて翁の木像を安置せり、

粟津の原は膳所より勢田橋本に至る松林をいふ、粟津の晴嵐とて八

景の一にして只見る青松一帶道を挾み清澗輕く岸をうつの處、清涼眞に掬すべし、

(雲はらふ嵐につれて百船も千船も浪の粟津にそよる　信　尹)

三井寺は大津町の西にあり、西國巡禮の札所にして圓城寺と稱す、天台宗にして天安二年僧圓珍勅を奉じて之を建立せしものなりといふ、東海道名所記に

大津の宮より乾の方にあたりて圓城寺あり、敎待和尙の住みたまひし仙靡智澄大師の草創なり、天智、天武、持統この三帝御誕生の御産湯はこの寺の井の水を吸み奉りける故に三井寺と名付けられしとかや、

とあり、二王門を入れは本堂、大講堂、金堂、唐院、勸學院、法輪院、及敎持和尙の廟等あり、又中院、南院、北院抔を併せて都て四

十三坊あり、本堂には觀音の像を安置す、辨慶の曳鐘は高さ五尺五分ありて古色蒼然たり、

石磴を昇り盡せば平地にして瞰下せば琵琶の大湖は烟波縹渺として前にあり膽吹、比叡、近江富士等盡く双眼に映じ來る、

唐崎の松は大津町より北一里餘にして唐崎神社の社頭にあり、千年の老樹縁長へに色濃く、今猶鬱々として繁茂せり、幹の周圍は殆ど五尋に及び枝幹百坪の地を蔽ひ數百の支柱を以て枝を支ふ、近年さしもの大樹も稍枯色ありて風雅の士大に之を惜み、爲めに護松會なるものを設け專ら培養せしかば生氣再び舊に復せりといふ、

唐崎の松は花より朧にて　芭蕉

石山寺は西國十三番の札所にして馬場より南一里餘、名の如く全山皆石にて觀月の好場所として世に名高し、寺は眞言宗にて僧良辨の

開基せしものに係り、寺域九千六百餘坪と稱せらる、本堂源氏の間祖師堂、寶性院、持寶院等外に六院六坊あり、木堂に安置する處の二體如意輪觀音は聖德太子の持佛なりといふ、

觀月亭は山上にありて眺望絶佳、大湖は明鏡の如く點々たる白帆は數ふべく、比良の峯は高く前にかゝり、勢田の長橋は脚下にあり、此地又螢を以て名高く、宇治川、音羽と並び稱せらる、

堅田の浦は大津を距る三里、浮御堂と稱ふるは湖中二十間許の突出せる堂宇にして、豐聰太子作の觀世音を安す、是又八景の一として世に聞へたり、

鎖あけて月さし入れよ浮見堂　桃青

たゝに落雁のみならず又觀月にもよしと聞く、

比良山は大津より六里二十町餘にあり、近江第一の高峯にして雪景

を以て聞ゆ、

急がば廻れの瀬多の長橋は瀬多川に架するものにして、長さ大なるものは九十六間あり、小なるものも又二十三間ありといふ、其中央に小島あり其他見るべきもの頗る多し、

大津には旅館として松坂屋、小林亭あり、松坂屋尤も古く信用あるものにして客扱叮嚀なりとの好評あり、宿料は四十錢より七十錢、一圓位なりといふ、

名物としては鯉、鮒、蕪、縮み等あり、

七景は
かすみの中や
三井のかね

加賀國

○山代溫泉

山代溫泉は江沼郡山代村にありて東海道線米原驛にて轉乘し大聖寺停車場にて下車すべし、(新橋より大聖寺迄三等賃金三圓九十六錢)此處より東南一里十町腕車通ず(賃金拾五錢)、泉質は鹽類泉にして字藥師山より湧出するものを遙かに導き一大浴槽を設けて、之を總湯といふ、家は二層の高樓にて頗る莊麗なり、

此湯は神龜二年僧行基初めて此靈泉を發見し、其後花山法皇北陸を御巡幸あらせられし時又此地に立寄らせ玉ひ今に至る迄山中溫泉と共に國内著明の浴湯たり、

旅館の數は二十を以て數へらる、其重なるものを荒屋、倉屋、高屋、

等とす、今倉屋より報告せし宿料を見れば一圓五十錢より一圓八十錢位なりといふ

○山中溫泉

前記山代溫泉と同じく大聖寺驛にて下車し、こゝより鐵道馬車の便あり（此道程二里二十町）此溫泉は古來北陸第一の鑛泉と稱せられ亦僧行基の發見にかゝる、湯は鹽類泉にして矢張總湯と稱へて、の中央に大浴場を設け各々溫泉宿より湯女に導かれて總てこゝに集る、普通の浴場は入浴賃を要せざれ共外に上等なるものありて浴室を分ち湯錢として一回金五錢を徵す、

地は江沼郡の中央にありて四面山嶽を繞らし、大聖寺川は東に向つて貫流し、頗る山水の美に富み小鹽原の名さへあり、蟋蟀橋は川の兩岸最も高き斷崖絕壁の處に架せり、橋下は奇岩突兀として淸瀨諸

所に碎け、時に珠玉を轉はし又急雪を飛ばす、橋の畔に酒樓二三あり、眺望佳なり、其下流に道明淵あり、芭蕉翁の碑あり

山中や菊は手折らず湯のにほひ

を刻す、此外醫王子、長谷部神社、黑谷橋、杉野の大杉、洞岩、女夫岩、屏風岩、狛犬岩杯一訪の價あり、

又名產としては九谷燒、及び漆器あり、

旅館は總てにて廿四五あれ共中にて重なるは吉野屋、三谷や、扇子屋等とす、宿料一泊一圓より三十錢位迄あり、

伊勢國

○二見浦

二見の浦は參宮鐵道により山田驛にて下車し（名古屋よりすれば龜山にて轉乘すべし、此賃金合計一圓七錢）、東へ二里にして二途あり一は停車場より直ちに行くものと、一は內宮を經て至るものとす、但內宮を經て行くものは十數町遠しとす、海濱には奇石怪巖諸處に突起し、風光頗る秀麗なり、岸を廻りて道の極まる處双岩駢立して其間に注連を張る是を立岩といふ、大なるものは三丈に近く小なるものも一丈二尺に餘る岩色は蒼潤にして木理紋を爲す、此所にて天氣晴朗の日は富嶽を望むことを得べし、又旭日の東溟に浴するの時は尤も絶觀たり、退潮せば步して此岩に渡ることを得、近傍又風景

に富み軟砂は碧浪に洗はれ細塵を停めず、青松遠く林をなして翠色滴らんとす、和歌に所謂淸渚の名空しからず、賓日館は海濱本道の右傍にあり、今は神苑會の附屬にして客室夥多を有せり、外に二見館（淸渚亭事）、太陽館あり、今二見館の宿泊料を見るに一晝夜八十錢より七十錢位なりといふ、海水浴場は明治十九年初めて開設せしものにて夏時は四方より來り遊ぶもの極めて多し、

○湯の山溫泉

湯の山溫泉は四日市を距る凡五里菰野村にあり、（名古屋より四日市迄關西鐵道にて二等賃金四十二錢）其間腕車通ず（五十錢）、湯は亞兒加里性を含み無色透明なり、功驗は胃腸病、咽喉病等に宜しく地は四面山嶽を以て包まれ溪水諸所に流出し、大氣又淸良にして最も避暑に適し、又療養場として頗る妙なり、

青瀧と稱するは三岳川の水源にして、高さ十二丈に餘り初夏新綠の候は四邊の清翠に映じ、名の如く碧玉を連ねたるが如し、又此地の一奇觀なり、

旅館としては旭亭最も名高く、外に壽亭、三杉亭等あり、宿料は一日五十錢位にして物價も又高からず、

○朝　熊　山

山は志摩、伊勢兩州に跨り、宇治の山田町より東へ七十二町にして、當山に登るには四道あるも宇治よりするを本道とせり、海面を拔くこと一千七百尺にして、頂上には勝峰山金剛證寺あり、臨濟宗に屬し、本尊は虛空藏菩薩にして、寺內廣く本寺には左馬頭義朝の佩刀及古鏡並に德川家康の愛物たりし碁盤一面を藏せり、

呑海院（奥の院）は當山の東北二町餘にあり、境內の富士見臺は嶮

崖數十丈の上に建てられ、天晴の日は遙に芙蓉峰を望むべし、其他尾三の諸灣、志摩の島嶼等歷々として數ふべく、寔に絕景なり、萬金丹藥舗は金剛證寺の境內に接し店舗を設く、朝熊萬金丹と云へば其名高く世に知らぬ者なし、

山城國

○嵐　山

嵐山は京都市の西方にありて、二條停車場にて乘車せば僅かに七錢にて嵯峨に達すべし、此地にて小督塚を一訪し、夫より數丁にして渡月橋あり、嵐山は龜山の南、大堰川の上方に在り、樹木鬱蒼として殊に櫻樹多く、陽春四月の候は全山總て花を以て包まれ絶景吉野に勝るものあり、此地又納涼地としてもよく、川には千鳥ヶ淵、戸難瀨川等の勝あり、千鳥ヶ淵は渡月橋の上流二三丁許にあり、淵上の岩を身投石と云ひ昔横笛、瀧口時頼を慕ふて三寶寺に至り遂はざるを怨みて投身せし處なりといふ、戸難瀨川は戸難瀨瀧の上流にして法輪寺の山下に達するものをいふ、渡月橋を渡り五六丁にして戸

難瀨の瀧あり、瀧の傍に名高き淺黄櫻あり、大悲閣は西方の山腹にありて、惠心僧都の千手觀音を安置す、閣前の左側に保津川を浚鑿せし角倉了以の碑あり、銘は林道春の撰する處なり、

又同所より西北に方り鐵泉あり、當時温泉會社なるものを設け、一般浴者の便を謀れる由、湯は炭酸を含み、リウマチスに特効ありといふ、

旅館は渡月橋の側に三軒屋ホテルあり、今は株式會社となり、客室も多し。其他八賞軒、三友樓、筆茂樓等總て眺望よし、宿料上等二圓より五六十錢迄、

忽見珠簾天半垂　美人深座隔蛾眉、
四湖豈樹西施比　更有嵐山白雨時、　劉石秋

山城國　嵐山

大和國

奈良

○奈

奈良は本邦の舊都にして天明天皇始めて此地に都を奠し給ひてより爾來桓武天皇に至る迄殆ど七世八十有餘年の間朝政一に茲に出で、百衙櫛比して、尤も殷賑を極めたり、されば名勝舊跡として觀るべきもの頗る多し、今左に其重なるものを擧げん、

猿澤池は停車場より三四丁にしてあり、周圍凡三町、古へより名高き池にして夏夜は螢夥しく、名所として數へらる、

南圓堂は池の北丘にありて、西國三十三ヶ所の一たるは誰も知る所にして又藤の名所なり、

春日神社は停車場より十町計り、官幣大社にして、社殿壯嚴、境内

廣く三十餘萬坪と稱せらる、毎年鹿角切祭及び三月七月十二月の十五日に大祭あり、此社は燈籠の多きを以て世に名高く、總計三千に近しといふ、其中寒蟬燈籠、萩戸燈籠抔は共に現世の模形として、常に美術家の垂涎する處なり、又境内には神鹿諸所に起臥し、人を見るも驚かず、優々として遊び廻る樣誠に愛すべきものあり、其他凡百の花介樹木鬱茂し、櫻花紅葉尤も多くして四時共に遊覽に宜しく、藤花は前記南圓堂と共に名所の一と稱せらる、

手向山八幡宮は菅公の「此度はぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」と詠せし所にして觀楓に名あり、

東大寺は南都七大寺の一にして、寶物は尤も多し、二月堂、三月堂は共に其寺内にあり、

嫩草山は一名三笠山と稱し仲麿の唐にありて、ふりさけ見ればと詠

ぜしは此所なり、滿山翠甍を展ふるか如く優美眞に掬すべし、頂上は眺望絶佳にして蕨を生ずる事多し、又觀月の名所たり、

鷲瀧は嫩草山の比隣花山にあり（停車場より凡三十町）高さ五丈四尺、樹木鬱蒼の間にありて納涼によし、西行の歌に、

三笠山巻を音にて知られけり氷をたゝくうぐひすのたき、

興福寺は七大寺の一として其名又著しく、其他野守池、雪消池、護國神社、盤若寺、一輪院寺見るべきもの夥多あり、但案内者は南圓堂附近にありて、十錢を投ずれば夫々手引すべし、

旅館は武藏屋、角定、明秀館、金波樓、菊水樓、三京樓、名あり、共に猿澤池畔にあり、宿料は上等一圓五十錢より五十錢迄、

○笠置山

名古屋驛より關西鐵道に乘車せは四時間足らずにして、笠道驛に達

すべし、（汽車賃金一圓二十八錢）同山は笠置村、木津川の西岸に跨り、南北笠置と分てり、行宮の古跡は南笠置の上にして、高く雲霄に聳ゆ、山は其の昔後醍醐帝が春の嵐の烈しさに、花の都を立出で給ひ、しばし此山を以てかくれがとしたまひしことは、誰も知るところなり、北小路玄慧が笠置山の記に、

とかくして夜晝三日に山城多賀の郡なる有王山の麓まで落させ玉ひてけり廢房、秀房も三日まで口中の食を絶たれければ足たゆみ身疲れて今はいかなる目に遇ふも逃れぬべき心地もせざりければせん方なくて幽谷の岩を枕にて君臣兄弟諸共に現の夢に臥し玉ふ梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞しめして木蔭にたちよらせ玉ひたれば下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを主上御覽せられて

さして行く笠置の山を出てしより天が下にはかくれがもなし、

藤房卿涙をおさへて

いかにせん頼む蔭とて立よればなほ袖ぬらす松の下つゆ

嗚呼誰か是を讀みて感慨の涙なからん、おもひ見るもかしこき心地ぞせらる、名勝古跡多あり、彌勒、藥師、虚空藏、貝吹の四巨石は其名高く、就中貝吹岩は嘗て帝の軍兵此岩に上り、陣螺を吹き味方を指揮せし處なりといふ、高さ十七尺、廣さ三十六尺に餘る、若し此上に登りて一望すれば、連綿たる山嶽は波濤の起伏するが如く下には木津の清瀬白布の如く流れ、點々たる帆舟數ふへし、其他千手瀧、笠置寺等見るべきもの多し、又此麓に炭酸泉あり、旅館を養神亭と云ふ、宿料壹圓より五十錢迄、

すゝしさや瀧みおろしてゆく山路

和泉國

○大濱公園

同公園は堺停車場を距る五六丁の西にあり、前は茅海に臨み、後に舊砲臺を負ひ、波止場は遠く海上に走り、此に不動緑色の燈臺を設け遙かに海上を照して夜々船舶の往來を便にせり、此地眺望佳絶、海濱には酒樓軒を連ね、皆三層四層の大厦なり、樓に上り眼を放たば紀淡の翠巒、播攝の峰光、双眸の裡に集り、靜波藍の如く白砂を洗ひて心地よく避暑の好地たり、然れ共近來京阪の遊客踵を絶たず、爲に日夜弦聲湧き、あたら近畿無二の名ありし遊園も熱爭俗化の感無き能はず、加之物價亦高く五圓金を懐にせざれば一夜の宿泊も快よくなすを得すと聞く、此地海水浴場あり是等を目的とせる茶

亭には赤前掛の婢女夥多ありて「お這入りやす、おかけやす」の奇語を放つて客を呼ぶ樣は又此地の一奇觀たり、旅館兼料理亭として重なるものは茅海樓、一力樓を初めとして、川芳樓、㊂樓、八角萬及㊁樓等あり。

○濱寺公園

沖つ浪高師の濱の濱松の名にこそ君を待ちわたりつれ、とある高師の濱は此處にして、青松白砂風光明媚にして、俗化せる大濱よりは遙かに勝れり、此地近きまでは大阪を離るゝこと稍遠く爲に探勝の士も多からざりしも、南海鐵道の此地に停車場を設けしより、來遊者俄に多くなり行き、今は旅館及料亭を兼ねたるもの海濱院の外に一力、川芳、鶴の家抔いへるもの出來何れも建築に壯を競へり、就中海濱院は最も古く、前大阪府知事建野鄕三氏海水浴者の便を謀り

立せしものにて公園中眺望の最も善き場所を占め、庭園の廣大、客室の清潔は云ふ迄もなく、大廣間は百餘疊を敷き、大小室數六十餘あり、現時當院の所有者は堺市仁井田祐三郎氏にして、氏は建野氏より保管を委ねられしより、專ら來賓の接待に心を用ひ、料理の鹽梅、湖湯の加減等は主人の自慢なりと聞く、公園區域は最も廣く數千株の老松、態ち極めて雅にして舞ふが如きもの躍るが如きもの銀沙の中を彩り、其光景到底筆紙の盡す處にあらず、須磨、舞子と共に茅ぬ海岸の三大遊園として稱せらるゝことわりなりといふべし、此地明治の初め姦商某無慚にも是等の老松を伐採せんとせしに偶大久保甲東此處を過ぎり甚く此勝地を失はんことを嘆き、

名にしおふ高師の濱の松が枝も世の仇浪はのがれざりけり

との一首の和歌を詠せしを某傳へ聞きて終に其伐採を止めしとぞい

みしき話といふべし、今海濱院の宿料を聞くに、一泊五十錢より七十錢八十錢迄にて、特別上等は一圓なりといふ、而して一週間滞在は四圓より五圓五十錢、七圓にして特別上等を拾圓とす、(汽車賃金大阪より二十錢)、

汐風に音もたかしの濱松に
かすみてかゝる春の夕なみ、　(清　女)

戀すてふ名のみたかしの濱千鳥
なく〳〵かへる袖のあだなみ、　(後鳥羽院)

○深日の浦

深日は南海鐵道によれば難波(大阪)より汽車賃五十錢北口(和歌山)の前驛にして深日村の海濱南北一里許の間を總稱す、一條の青松白砂を彩り、輕波洋々として西の方には淡路の青巒高く聳へ北は摩

耶、六甲、武庫、一の谷の諸嶺列なり、南は紀の海加太の湊は手に取る如し、渚は眞砂清らかにして櫻貝は形極めて愛すべく、拾ふて家苞(いへづと)にすべし、此地海水浴場としては最も好適の地なれども只だ旅館の可なるものなきを遺憾とす、近傍の冠石、帽子岩、入道岩などは名高く、其他奇巖巨石そこかしこに散在す、

夏の夜はふけゆの浦の郭公岩うつ波のたちかへりなけ、　親隆

紀伊國

○和歌の浦

和歌の浦は和歌山市の西南にあり大阪より南海鐵道に搭せば二時間と二十六分にして北口驛に着すべし（此汽車賃三等五十九錢）夫より腕車通す（車賃二十五錢）、本年二月頃迄は當地に南陽馬車會社なるものありて專ら市より同浦迄の往復を便にせしも今は早なし扨先和歌山市の目抜とも云ふべき本町通りを一直線に進み行けば翠松欝々たる間に三層の天主閣巍然として聳ゆるは、舊城にして今は公園となり二錢の下足料を投せば登閣するとを得、遊者は試みに一と度こゝに上り、四邊の絶景に目を嬉ばすも可ならん之を下り縣廳前を左に折れ小松原通りを過ぎ十數丁を行けば一帶の松並木あり此

あたりの松は所謂根上り松にして名の如く松根總て上騰して空洞鳥巣の如く高きは六七尺以上のものもあり大人と雖も直立の儘其下を自由に歩行するとを得又一奇なりと云ふべし、其他愛宕山、秋葉山、五百羅漢寺抔すべて沿道にあり共に一訪の價値あり松林の盡くる處は即ち和歌の浦にして浦邊に出つるには二途あれ共今は遊覽者の爲新道の設置せられたれば左折すべし行くと又四五町にして玉津島の社前に出づこゝに奉祀せる神は和歌の浦の靈に衣通姫を配せ祭る此社は最も古く殆ど、創建の年月を詳にせずといふ此玉津島を詠める古人の歌は赤人、人麿を初め數限りなく近くは天保十三年畏くも孝格天皇より左の大御歌を納めさせ玉ふ、

玉津島入江の松の若緑めくみくもらぬ年を重れて

玉津島社の後ろに奠供山あり是ぞ聖武、稱德兩帝の行宮を置かれし

望海樓の古蹟にして一と度此頂に上り目を放たば、和歌浦の全景は雙眼の裡に映し來るべし寔に其絶景筆にも畫にも盡し難く眞に聖武帝が明光浦と名づけさせ給ひし事の畏さを想ひ參らすなり、祇南海が嘗て

東西山水美、　未有若明光、　惜哉數千歲、　奇語無一章、

と憾みしも此處なり抑もこの浦の佳景を思ふ樣見盡さんとするには此山よりするか若しくは對岸の紀三井寺よりするを好しとす此兩所より目を縱にして初めて和歌の浦の勝を說くべし、

杭州西湖六橋の面影ありといふ三斷橋は奠供山の下玉津島の社前にあり之を渡れば妹背山あり頂上の塔を多寶塔といふ本尊の釋伽、阿難、加葉の三尊は昔加藤清正が朝鮮征伐の時戰利品として持ち歸りしものなりといふ、且本尊の、體內に養珠尼公の靈骨を納む當山の

寶塔は日護僧都の慶安二年に開基せしものにして東照宮三十三回の追福の爲彫多の小石に法華の題目を書寫せるを太上皇の叡聞に達し御震翰の題目を染させられ猶諸國より集來せる題目石部數二十一萬を併せて此寶塔の下に收めあり塔を下れば水殿あり此處より名草山上の紀三井寺は恰も蜃氣樓の如く見らるべし水殿の下、湖の滿ちたる時は自ら海中にあるが如く四邊の光景言ふべからず南海が「池上何處無好山、不知江南山水美、山秀水明綵雲裏」云々といへるも過賞ならず、

東照宮は玉津島の西、山上にあり祭神は德川家康公にして元和二年慈眼大師の開山せしものに係り、磴道を登り盡せば唐門あり柱は總て四季の花卉を彫刻し精緻巧麗目を驚かす其他拜殿、神樂所、樓門あり石の華表には那波道圓の撰銘あり曰く、

紀伊國　和歌の浦

東照掲日、華表劉石、維明維堅、萬世垂跡、

寶殿は山上に建られ善美輪奐をつくす、其他南龍神社は德川頼宣を奉祀せしもの又天滿宮は菅公を祭れるものにして共に見るべき處とす、夫より南、獨螯蟹（テッポウガニ）の栖む蘆の葉の茂れる處を一二丁行けば、一條の松林あり前は即ち片男波にして長汀曲浦の趣宛然畫中のものたり南の方には地の島、沖の島、雜賀崎の岬頭を望み得べく左顧すれば毛見崎の軟砂は夢の如く淡し、又海水浴場としては最も危險少なく夏時は四方より來遊するもの極めて多し旅館としては名高き蘆邊屋あり古へは萱葺の屋根に暖簾を垂れたるものなりしが今は三層の高樓となり妹脊山の麓に海水温浴場を設け客室清潔にして當地唯一の旅館とす樓上よりの眺望は極めてよく紀三井寺妹脊山は呼べば應へんとし對岸に架せる數丁餘の長橋は虹の如し、外に米榮、朝日家あ

り共に好位置を占む、其他明光館は株式會社にして目下建築中なり家屋宏壯にして一見可なるに似たれ共惜哉位置惡しく眺望の賞すべきなし、

名物は妹脊海苔、蜊、芦柄團扇、芦邊燒など名高し、今は是等の名産をのみ鬻ける家もあり、

水呼樓臺映落霞、石欄人影過橋斜、伽羅山上纖々雨、飛濕仙娥廟裡花、（溪　琴）
わかの浦を松の葉ごしになかむれば楫によする螢のつり舟　（寂　蓮）

○鉛山温泉

鉛山温泉は西牟婁郡瀬戸にあり濱湯、栗湯、元湯、崎湯、屋形湯、礦湯、疝氣湯、是を稱して七湯と云ふ泉質は齊しく強きアルカリ性にて獨乙ヱムスの高名なる「クレエンヘンブリュチン」に同じく所謂ヱムセル鑛泉と其効を均しと聞く又効驗は胆道膀胱加答兒、慢性皮

膚病、痔、黴毒、僂麻質斯等にして、婦人には白帶下及子宮病に奇効ありといふ抑此湯は本邦に於ても餘程古きより世に知られ齊明帝の始めて行幸せられしより爾來屢聖駕を枉けさせ玉ひしといふ、近くは鴻儒南海祇園此地に謫居し鉛山七境を撰み詩を賦し賞揚せしより今は浴客年を追ひ增加し旅館の新築せるもの又多く甚旺盛なり熊野雜誌に此地の景を敘せるものあり曰く、

蓋此地横出於瀛海之中、偃蹇蟠屈、如臥龍奔蛇、北與田邊城相對、面勢海灣々大十有餘里、其間蒼岩秀壁之削立、曲浦長洲之聯亘、漁村之點綴、島嶼之棊散、異態詭狀、不可縷形、憑高望之、恍如入遷都、其遠望則峻嶽疊峰、濃淡分彩、聳拔於雲表大瀛、萬里渺無際涯、賈帆商船、往來出沒於風濤煙雲之中者、一舉目而足焉、誠海南之壯觀也

以て其一斑を推知すべし、

白良が濱は此邊の海濱一帶の總稱にして銀砂皎然殆ど雪を欺き目も眩せんばかりなり誰やらの句に、

冬の日や白良が濱に鳥二羽

夏時は浴後海岸に出で垂釣するも又妙なり如何なる素人と雖尺魚の二三尾は容易なりといへり眞僞は往て試むべし、

若此仙鄉を訪はんとせば大阪川口より午後五時出帆の商船會社汽船に搭乘して（貳等賃金九拾錢）翌午前十時田邊港に着すべし夫より通船に轉乘せば瞬時に達することを得陸路は目下田邊間起工中にて明年迄には腕車通ずと聞けり、

旅館は酒井家、有田家あり酒井家は客室總て海岸に臨み横臥して眞帆片帆の行きかふを眺め得べし主人又質朴にして來客の欵待行屆か

さるなし宿泊料は一日三食六十五錢以上一圓五六十錢迄あり、

泉滕金寶氣、　山朶水精苗、　日月四東海、　風雷旦暮潮、　二竪跡已遁、
三山路不遙、　新知同病客、　傾盞便相邀、　（南　海）

銀沙金液好詩料、芝石龍岩好畫材、天意滴降祇白玉、彩毫龍貫勝區來、（拙　堂）

濱づたひ崎の湯壺にゆあみして
歸るこゝろを誰にかたらん　（品川やじ）

○那智の瀑布

那智の大瀑布は紀伊國東牟婁郡にありて、順路は大阪より商船會社汽船に乘込み午後五時に出帆せば翌日午後二時十分勝浦に着すべし、此船賃二等二圓二十錢、茲より一里、天滿を經て市野々村あり、又十町にして一の鳥居に達すべし、こゝを過ぐれば羊腸たる坂路にして、樹林深く繁り、あたりの景色寂寥として時々異禽の聲を耳にするのみ、登り盡せば眼界頓に開け青巒疊々の間遙に熊野浦を望む

べし、夫須美神社を拜し、觀音堂あり青岸波寺と稱へ西國三十三ヶ所第一の札所にして、巡禮者がふだらくやの咏歌を唱へて詣づる處なり、中に閻浮檀金如意輪觀世音を安置せり、これより數丁の間山一層深く天に摩せる老樹路を挾みて暗く、苔石又滑かなり、此處に來れば忽ち遠雷の轟々たる響を耳にすべし、こゝを出づれば、飛瀑神社あり本祠は瀧を神體として祀れるものにして、拜殿のみを設く、仰ぎ見れば海内無雙の大瀑布は截然八十餘丈の絶壁より直下す、

小津久足の記に、

かくて十二町ゆき盡して、瀧のもとに下る、瀧見堂あり、その堂に入りてのぞむ、誠にそのさまは心も言葉もおよばれず、譬へむにものなくたゞ肝をひやしてあきたる口を塞きもあへず、暫し見

紀伊國　那智の瀑布

居れば、小雨の如く、しふきかゝりて、目もくるめき山も動くやうに見ゆ、丈の高さ、幅の廣きことなどいはゞ中々おろかになしぬべし、音の烈しきことは五六丁まへより足もとに響きたれば、あたりに來りてはいふも更なり、あたりの山、木はふかく老杉のうちに新綠の見ゆるさまなどいひしらず、新綠の時節は、山のさまはもとよりにて、水も常よりおほきよしなり、瀧のおつるあたりは、絶壁なれば水ふかゝらねど、石面にあやしくおひたる、木立ちのさまは、一くさの風情あり、是にくらぶれば、早く見し布引、養老などは筧にも劣れりといふべし、瀧の落ちいる邊はみえず、下に大なる嵓ども、數かきりなく、積み上げたらむやうなるが、常の瀧のさまにかわりて、又一つの壯觀なり、世の諺に、山は富士、瀧は那智、花は吉野といへる、うべなることにて、此

三勝は諸越にもなかるべしと、貝原翁は、扶桑紀勝にしるされたり、此の三勝のうち二つは、吾度々契りありしかど、この瀧はしも未だ知らざりしを、こたび本意とげたるはいとうれし、

此記よく其實景を寫せり、尙此外に二の瀧、三の瀧など總て一の瀧の附近にあり、

○高野山

大阪より南海鐵道にて和歌山に趣き、紀和鐵道により橋本驛に下車するか、若しくは大阪より關西（舊大阪鐵道）線により大和高田に出で、南和鐵道にて五條に行き、更に紀和鐵道に乘替へ、橋本にて下車すべし、歸りには和歌山に出で、和歌の浦、紀三井寺抔を一覽するもよかるべし、先此線により行くとせば、大阪湊町より高田迄三等四十二錢、高田より五條迄三十錢、五條より橋本迄六錢合せて

大阪より七十八錢、橋本町より高野の麓學文路迄腕車あり、（賃金二十錢）此地には石童丸が宿りて、其母の害に遇ひしといふ玉屋なる宿屋今猶存せり、是より坂路にて駕籠は一挺三圓の定めなり、併し此間見るべき古跡又少なからざれば、ゆる〳〵徒歩するも亦妙なるべし、山頂は頗る平坦にて寺域三里四方に跨り、百三十餘の僧坊あり、古しへは一千餘坊ありて、寺域又七里四方に及べりと聞く、爾來幾度か祝融の災に罹れ共、今尚存するもの斯の如し、以て如何に絶大なる靈場なるかを知るべし、

大門は當山の西方にありて、樓門高く聳へ屋根は總て赤銅を以て裹み、法橋運長の作と傳ふる一丈六尺の金剛力士左右に立てり、門を入れば西側には僧坊、珠數屋など軒を列ね、行く事更に十四五丁にして壯麗目を驚かすべき金堂あり堂は二層の高閣にて、中に藥師如

來を安置せり、其他灌頂堂、御影堂、大會堂、三昧堂等何れも天保十四年の火災に遇ひ、烏有に歸せしも今又舊時に復せり。

金剛峯寺は之より二三丁の處にありて當山の主坊とす、是亦天保の災に罹り燒失せしを其後再建せしものなり、西方には勅使門あり、豐臣秀次の生害せし寺にして、その室を柳の間と稱し今尚存せり、こゝより又七八丁にして一の橋あり、橋の東に進めば山まず〳〵深くなり老樹鬱々として、清水諸所に涌出し、幽邃閑雅人寰を絶つ、其奥には弘法大師の入定せし奥の院あり、是より二十餘町の間四邊總て塋域にして、無數の墓碣密接して立ち、恰も此處に來れば古今の豪傑名士の一堂に會せし如く、坐ろに懷古の情に堪へざるものあり、其重なるものは平敦盛、曾我兄弟、多田滿仲、淺野長矩、德川頼宣を初め、其他各諸侯の墳墓等數ふるに遑あらず、芭蕉の碑には、

父母のしきりに戀しきじの聲、　二九四

なる句を刻し、又傍に其角の碑あり、是又

明塔の鳥居や賣にも神無月、

なる句を刻せり、夫より猶も奥深く進めば、大師の廟所あり、此處に御廟橋ありて長さ四間幅六尺、橋板の數三十七枚ありて、金剛界の三十七尊に象り、罪障深きものは渡ることを得ずといへり、橋下は即ち玉川にして、清水潺湲として流る、傍に碑あり安房の志道が、

諸共に汲てこそしれ高野山蓮の露の露の玉水、

なる短歌を長歌一首と共に刻せり、橋を渡れば路の左方に靈元、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝の諸帝を初め奉り孝明天皇の御寶塔建てり、其先には燈籠堂、經藏、骨堂等あり、今茲に高野全山のわらゆる名所古蹟を擧げんは容易の業にあらず、

たゞこゝには其重なるものをしめせるのみ、かゝる靈山なれば盛夏の候と雖も寒暖計また七十度を踰ゆる事稀にして洵に避暑の好地といふべし、而して山中には旅館なるものなしと雖も寺坊に依頼せば實費を以て心安く承諾し呉るゝべし、歸路は九度山に眞田幸村の隱家を尋ね、夫より大師の慈母の舊跡たる慈尊院に參詣し、橋本又は名倉より紀和鐵に乗車し、粉河寺を一見し直ちに和歌山に入るもよかるべし、

むかしおもふ高野の山の深き夜に曉遠くすめる月かげ　（知　家）

無風杉檜忽成群　知是空中天狗行

一萬僧徒齋入定　峰雲潤月夜三更

（旭　莊）

父母のしきりに戀しきじの聲、

なる句を刻し、又傍に其角の碑あり、是又

卵塔の鳥居や實にも神無月、

なる句を刻せり、夫より猶も奥深く進めば、大師の廟所あり、此處に御廟橋ありて長さ四間幅六尺、橋板の數三十七枚ありて、金剛界の三十七尊に象り、罪障深きものは渡ることを得ずといへり、橋下は即ち玉川にして、清水潺湲として流る、傍に碑あり安房の志道が、

諸共に汲てこそしれ高野山蓮の峯の露の玉水、

なる短歌を長歌一首と共に刻せり、橋を渡れば路の左方に靈元、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝の諸帝を初め奉り孝明天皇の御寶塔建てり、其先には燈籠堂、經藏、骨堂等あり、今茲に高野全山のあらゆる名所古蹟を擧げんは容易の業にあらず、

たゞこゝには其重なるものをしめせるのみ、かゝる靈山なれば盛夏の候と雖も寒暖計また七十度を踰ゆる事稀にして洵に避暑の好地といふべし、而して山中には旅館なるものなしと雖も寺坊に依頼せば實費を以て心安く承諾し呉るゝべし、歸路は九度山に眞田幸村の隱家を尋ね、夫より大師の慈母の舊跡たる慈尊院に參詣し、橋本又は名倉より紀和鐵に乘車し、粉河寺を一見し直ちに和歌山に入るもよかるべし、

むかしおもふ高野の山の深き夜に曉遠くすめる月かげ　（知家）

無風杉袷忽成聲　知是空中天狗行

一萬僧徒齋入定　峰雲澗月夜三更　（旭莊）

攝津國

○有馬溫泉

日本三大溫泉の一なる有馬溫泉は、攝津國有馬郡湯山町にあり、往古舒明、孝德の二帝此地に行幸あらせられしより溫泉の名海內に響き渡り、爾來行基菩薩の再興、仁西上人の修造又は豐公の修築等連綿として、今日に至れり、泉質は鹽類泉にて皮膚病、打傷、中風、慢性僂麻質斯、及子宮病等に特効ありといふ、地は六甲山の北腰にして、海面を拔くこと一千三百尺、氣候又人身に適し夏時は淸凉にして、蚊蠅なく避暑の好地たり、抑此地たる山間僻地なれ共溫泉あるを以て日を追ひ繁榮し、當時人戸四百餘あり、皆山崖によりて築かれ、多く旅宿業者又は土產物抔を鬻げり、溫泉場は明治二十四年

の改築に係り、其構造は日本風にして、宮殿に模擬し頗る壯麗なり、現今は奧の坊、池の坊、二階坊、北の坊、尼崎坊、下大坊、中の坊等あり、總て屋宇廣大にして、數百の浴客を容るゝに足る今奧の坊よりの宿料報告によれば宿泊料は通常六十五錢晝飯料三十錢位なれ共概ね一週間定めにて席料及食料とを分てり、席料は一週間五十錢以上參圓迄、別莊は參圓以上にて外に蒲團料一夜大一錢五厘以上六錢迄、敷壹錢以上四錢迄、但絹夜具は此外と知るべし、

名產としては有馬筆、籠細工、竹細工及有馬燒等あり、

順路は大阪より坂鶴線により、三田驛にて下車すべし、(此間賃金五十一錢)近傍名勝あり、有馬六景は皷ヶ瀧の松風、落葉山の夕照、溫泉寺の晚鐘、功池山の秋月、有馬富士の暮雪、有馬樓の春望、をいひ外に瑞寶寺、(溫泉より七丁)花山院(溫泉より一里八丁)羽束觀

音(温泉より一里十五丁)共に一訪の値あり、

○箕面山

楓樹を以て有名なる箕面山は、摂津國豊能郡箕面村にあり、坂鶴線池田驛にて下車せば(大阪より汽車賃二十錢)夫より腕車通ず、(賃金二十五錢)山中瀧安寺あり、役行者の開基にして境内の辨才天は長さ一尺五寸、行者の自作せしものにかゝり、安藝の嚴島、近生の竹生島、相模の江の島及當山を併せて日本四辨天といふ、境内幽邃にして殿舍又古雅なり、此地深秋紅葉の時節は云はずもあれ盛夏又避暑によく、有名なる箕面瀧は瀧安寺より二丁にして、直下十一丈幅又十五尺に餘り、沛然銀河の中天より墜つるが如く、轟々として水聲山谷に振ふ、瀧の近傍に三鈷の松、座禪石等あり、旅館としては岩本樓外二三軒あり、皆辨天社前に櫓を列ぶ、

○寶塚鑛泉

寶塚驛より僅かに二丁、六甲の峰巒將に盡きんとする處松樹鬱蒼の間にあり、鑛泉は炭酸冷泉を沸かしたるものにて、浴槽廣濶にして温度適宜なり、夏時は避暑を兼ね浴客蟻集して甚だ盛なり、旅舍は分銅屋、泉山樓、寶樂屋等名高く、前は潺湲たる武庫の清流に臨み、後に峨々たる兜山を控へ、風光頗る秀麗なり、今分銅屋より報告せし宿料によれば一等七十錢、二等六十錢、三等五十錢にして、晝飯は矢張三十五錢、三十錢、二十五錢なりとぞ、

大阪より坂鶴線に乘車せば、一時間にして達すべし、此瀧車賃金二十九錢、

○須磨の浦

須磨は神戸を距る五哩許りにありて(神戸より瀧車賃金七錢)山陽

鐵道の停車場は西須磨村にあり、此地の勝景たるは古へより名高く、後は峨々たる鉢伏、鐵枴の諸山連り、前は渺茫たる海を隔てゝ朧に霞む紀泉の山々を望み得べく、右顧すれば淡路島山、一の谷、二の谷及三の谷を一眸の裡に收む、此地海水浴場、轉地療養地として、日に増し盛んとなり夫が故、近來傳染病患者の來り保養するもの夥しく、東の大磯と並ひ稱せらる、風景の如きも古人の歌に詠み、文に賞せし頃とは漸次其趣を異にし、風致を損せしは勿論なれど其名所古跡の多きは、今も昔も變らず、先づ見るべき重なるものは檜跡、松風村雨鹽濱跡、行平衣掛松、月見山、須磨寺、義經腰掛松、敦盛首塚、松風村雨の舊跡、源光寺、關屋跡、等數ふるに遑あらず、名物としては似雲が「わびぬれば身にしむばかりうまかりき須磨の麥味噌うしほざうすい」といひし磯馴味噌あり、其他須磨燒なる陶器もありと云ふ、旅館としては保養院を初しめ松の家、海月館、海山樓等あり、宿料一等三圓より二圓、一圓五十錢、一圓等あり、其他農家或は漁家にして下宿兼營せしものは數十軒を以て數ふとき

く、

歌成玉樹醉金樽、　燕雀安知棟宇燔、　飛將忽從天半至、　全軍爭向海濱奔、
縱横利刀舟中指、　寂寞寒潮月下魂、　郡塢空成百年計、　一朝荊杞擁頽垣、
（良　齊）

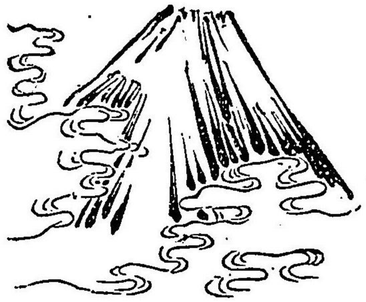
すまの海士の鹽燒けむり風をいたみ
おもはぬ方に棚引にけり
（詠人不知）

○鹽屋海水浴

須磨停車場より乘車すれば、僅に六分間にして鹽屋に達す（瀛車賃神戸より十錢）此地須磨、舞子の中間にありて、風光又見るべきものあり、海水浴場として適し、ビーチハウスホテルは重に西洋料理

摂津國　鹽屋海水浴

を調進す、

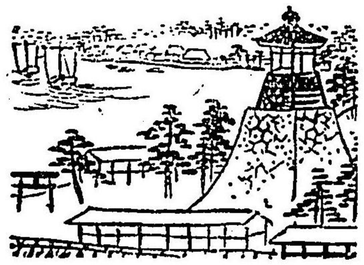


丹波國

○保津川

保津の奇勝たるは天下に名高し、人騒の富士川を下り以て急湍膽を寒からしむる事數回ならずといへども、一度此の保津を見れば又前者の如きは言ふに足らざるべし、さて之を探らんと欲せば、京都鐵道線により、丹波の龜岡に向ひ(京都七條停車場より三等二十六錢)川舟を僦ふて此急瀨を下るべし、此行は初夏新綠の候を以て最も可しとす、兩岸の峭壁は天を挾て屹立し、躑躅花巖際を點綴し、又蓬底時に嵐翠滴て征衣爲に青きが如き眞に壯觀たり、峽中奇巖怪石諸所に起伏し、水勢矢の如く奔流激湍石と相搏ち、轟然として百雷の一時に落つるが如し、其舟の疾き事、又譬ふるにものなく、當士の

左右に竿を廻し敢て櫓櫂を用ひず徐ろに岩石を避けて舟を下す、其巧妙實に驚嘆の外なく、初めて是を見しものは、神飛び魄馳するの想あり、奇巖多く、屏風岩、書物岩、蓮花岩、及扉岩などは最も名高し、或人此峽を呼んで蜀の三峽の趣ありといへり、蓋し溢美の言ならずといふべし、船の駐る處は即ち嵐山の麓にして、渡月橋は虹の如く中天に横る、寔に畿内の絶勝たり



丹後國

○天の橋立

大阪神崎驛より阪鶴線により、福知山驛にて下車し、(此三等賃金一圓三十三錢)こゝより腕車又は馬車にて名高き元伊勢、大江山、由良の港等を沿道に見て、宮津町に出で、智恩寺(切戸の文殊)に向ふべし、此寺は臨濟宗妙心寺派にて本尊の文殊は梵天帝釋化現の作に係ると云ふ、境内廣く北は岩瀧の海岸に接し、天の橋立は東北より來りて直に岸頭に迫る、其一小海峽を文殊の切戸と稱し、風光秀麗なり、

抑橋立は成相山の麓、江尻の灣頭より一砂洲の興謝の晴波を横斷して、突出するものをいひ、長さ二十七町に餘り、幅又一丁に近き處

ありて、一帶の青松其上に繁茂し、枝を垂るゝこと砂上を離るゝ僅かに數尺にして、樹々直立、枝々均調、宛かも一文字を引たる如く、遠くより望めば松翠碧波に映して水中に松を生するかと疑はれ、水天髣髴、天上又橋あるに似たり、天の橋立の名蓋し之より來るもの乎、天外庵蝶夢の記に、

名にしおふ、與謝の海の秋の月見んとて、文下宜甫の兩士をいざなひ、大江山幾野の道の露を分て、爰の宮津なる見性精舍に頭陀を下せば、かねて契りし人々群來りて、今宵は旅つかれやせん、されど北國日和さだめなきこの名月の頃なれば、翌の夜も覺束なし、いざ給へ、橋立の待宵の月見せ申さんと、人々に勸められて船にうちのり、棹の唄をかしく漕めぐり、切戸のほとりとある松か根に船を繫ぎて月待ほどの夕けしき、花も紅葉もなかりけりと

や、

待宵や夕日の里の飯ふもり

よべにも似ず、今宵は打くもり、雨そぼちぬれば、船の遊びも心もとなしとて、夕日のうらなる對潮庵に誘はれて、欄干につゝ杖つきて見渡せば、與謝の海、橋立の松をはじめ、えも言へぬ島々まで、目の下にありて畫けるやうなり、斯て夜ふくるまゝに雲はれて、もれ出る月の面にひら〳〵とひるかへるものゝ月影にうつれるを、傍の人の是なむ、金太郎鰯とて、此内の海の名物なりとかなれば、

夕月や飛よる魚も金太郎

日本無雙の勝地に仲秋の月をも併せて眺めたりとは、蝶夢も又果報者なる哉、今此奇景を賞するには二ヶ所あり、一は成相寺よりする

と一は樗峠よりするものとあり、共に絶觀とす、

但馬國

○城ヶ崎溫泉

此温泉に行かんとするものは、播但鐵道の生野驛にて下車し、(神戸より三等賃金一圓五錢)長谷村を經て、行程凡十六里餘此間腕車通ず、

此湯の來歷は甚古く、舒明天皇の御宇より湧出し、降りて養老年間道智上人の此地に來り、開湯せしものにして、地は西南に翠巒を繞らし、東方に城ヶ崎川の清流を控へ、風光明媚にして、空氣清爽最も避暑に適す、行通の便稍完からざるにもかゝわらず、年一年と來浴者を增し、當時甚盛なり、泉質は鹽類泉にして、無色透明、六湯あり、鴻の湯、御所の湯、口の湯、柳の湯、曼荼羅湯及地藏の湯を

いふ、總て浴室は宏大にして清潔なり、當村は湯ヶ島村と稱し、人家凡四百、郵便局、警察署抔あり、

旅館としては、三木や、油筒屋は名高く、猶此外數十軒ありといふ、

宿料は上等一圓五十錢以下四五十錢迄あり、

名産としては、麥藁細工、桑細工等とす、

朝すゝみ楓の下に
たちよらん　（方山）

播磨國

○舞子の濱

鹽谷停車場より垂水を經て舞子驛あり（汽車賃神戸より十四錢）此地又須磨と並び稱せられ、勝地を以て鳴る、汽車を下りて濱邊に出づれば、一叢の松林あり、枝幹蟠曲奇姿異態を恣にし、自から他所の松と同じからず、此海濱に來れば、淡路島は增々近くして、手を延せば促へんとす、其他岩屋浦、松尾崎等目捷の間にあり、旅館兼料亭としては左海屋、龜屋、萬龜樓、松菊樓等あり、此邊の旅館は總て矩模小さく、夏時に至りては客室に不足を生じ、往々來客を斷ることありといふ、名物としては松林中多く松露を産するを以て松露糖なる菓子あり、風味喜ぶべし、其他舞子燒等あり、今左海屋よ

り報告の宿料を見るに上等一日參圓、中等貳圓、下等一圓五十錢なり、

○明石海水浴

明石の浦は舞子の次驛にして神戸より汽車賃十八錢を投ずれば一時間ならずして達するを得べし、此地又風光絶佳にして、海水浴場には最も適せり、人丸神社は停車場の東丘にあり、祠宇大ならずとはいへ自から雅致を供へ、瞰下せば明石の市街は手に取る如く其殷盛なるを望み得べく、紀讃の峯巒は雲煙糢糊の間にあり、其他名所としては月照寺、八ッ房梅、盲丈櫻、雲井櫻等あり、海水浴舍は衝濤館あり、客室清潔に取扱叮嚀なり、宿泊料は上等一圓より七十五錢、五十錢位なりと云ふ、

○飾磨海水浴

飾東郡飾磨市の海濱にして、姫路市の南一里にあり、前は播磨灘に臨み港内遠淺にして海水浴場として、最もよく、近來諸方より盛夏の候に至れば、來遊するもの多し、海濱には天滿宮あり、濱の天神といふ、又白河法皇の行幸せられしと傳ふ、御幸橋あり、

旅館としては紀の市、熊五、魚市、丸萬、磯田等あり、宿料一等五十錢、二等四十錢、三等三十錢、晝飯料又二十錢より十錢迄あり、

安藝國

○嚴　島

日本三勝の一なる嚴島を訪はんとせば神戸より山陽鐵道線により、宮島驛にて下車すべし、此賃金三等二圓十錢、宮島驛より嚴島へは汽車の發着毎に汽船の接續あり、八錢の賃金と十五分間にて有の浦に達すべし、此處にて上陸して濱の町を過ぎ、再び濱邊に出づればこゝを三笠濱といひ、直に本殿あり、本殿には市杵島姫命、田心姫命、端津姫命を祀り、廣殿には國常立尊、素盞雄尊、天照太神を奉祀す、抑も嚴島神社は推古天皇の御宇、安藝の住人佐伯鞍職勅を奉じ、初めて社殿を造營せしものにして、爾來幾度か兵燹に罹り舊記の多くを失ひたれば、又其古を考ふる事能はずと雖も、兎に角延喜式にも

歴然として其名を存し、三代實錄に二度までも贈位の事を記しあるを見れば其當時の盛社なりし事も知るに足るべし、次で平清盛安藝守たりし時も崇敬の心淺からず、更に社殿、廻廊、華表に至るまで悉く修理を加へたれば、其壯觀又天下に數なきに至れり明治四年始めて國幣中社に列せらる、

さて又本殿、廣殿の外に幣殿、祓殿、拜殿、高舞台、平舞台等あり總て平沙の上に築かれ、滿潮の時には海水來りて其床下を浸す、其端に樂房あり、左右二ヶ所に分れ海中に突出すること凡七間、遙かに大華表を望み絶景なり、其盡くる處を火燒前と稱す、又拜殿の左右には曲々たる廻廊其長きこと百四十八間に亘り、一間毎に鐵燈籠を懸く、夜に入れば悉く之に火を點じ、火光海水に映じ壯觀比なし、又廻廊の楣間には無數の書畫扁額を見るべし、皆古今名家の筆

にして就中古秀の張陰飛、素絢の秀鄉、光信の三十六歌仙、藍江の鐘馗、探幽の鯉、抱一の山水、應擧の鷄、兆殿司の蝦蟇仙人、常信の三福神、祖仙の猿等筆力最も雄健にして衆目を引く、廻廊を渡れば神社あり、天忍穗耳命、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野樟日命を合祀し、本殿、拜殿、稜殿あり、鏡の池は其傍らに半月形をなせるをいひ、退潮せば其凹處に水を殘し、夜に入れば明月影を宿し、最も美觀なり、大華表は火燒前を距る八十八間の海中にありて、柱の高さ七間二尺五寸、周圍五間三尺三寸、副柱の高さ四間四尺三寸、圍り三間五寸、棟の長さ十二間一尺七寸、上棟軒先まで一間六寸、額庇二間、左右柱の距離五間五尺八寸、部ての高さ八間三尺七寸にして額は故有栖川熾仁親王の御親筆なり、此華表は古へより幾度か改造せしものにして現今のものは明治八年の再築に係る、更に西廊を渡り盡せは、一條の松林あり、百八の燈籠は松樹の間に立並び、左は御手洗川、右を玉の御池といふ、此邊神鹿夥多悠遊し、甚だ人に親しむ、御手洗川を渡れば大願寺あり、平重盛の手植の松今尙存せり、更に海に沿ふて西すれば大元浦あり、櫻樹多く花時は佳なり、大元神社は路傍にあり、多寶塔は大元浦の後山にあり、この處を多寶岡と云ふ、猶進んで瀧町に大聖院あり、夫より筋違橋を渡り花園あり、櫻樹數十株中に一株の古松あり、此處は後白河法皇の行宮松木の御所の在りし地にて御幸の松の名あり、又橋畔に寶庫あり拜觀料を納めて一覽すべし、こゝを過ぎて本社の後に三垣ヶ原あり、古へは觀音ヶ原といひし處なり、更に南に入れば南町あり、其奥を紅葉谷と云ふ、名の如く楓樹多く、御手洗川の渓流また此處より發し溪水潺湲時に麋鹿の呦々たるを聞くなど深秋の候は

最も景致に富む、こゝより再び踵を回らして、三翁神社の傍に還れば其東北には名高き千疊敷あり、昔豊臣秀吉征韓して凱旋の際築造したるものなりといふ、梁間十間五尺、桁行二十間、椽幅八尺にして四方に欄を回らし、閣内に豊國神社あり、其南に五重塔あり、高さ凡十丈應永十四年の創建に係り、更に天文年間に於て修理せしものなりと云ふ、又彌山は本社の南に聳へ、海面を抽くこと一千三百六十五尺、山中白糸の瀧あり、又御山神社は嚴島大神三笠濱に鎮坐の初め、影向ありし舊跡にて、同神を祭れり、其他求聞地藏、晏陀羅石、平宗盛の寄進にかゝる、巨鐘等見るべきもの少なからず、山巓に頂上石あり高さ三丈餘、眺望佳にして、廣島市、西に周防の諸峯を望む、

「安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比壽」と俗謠にある如く、有

の浦より船を艤して此七浦廻りをなすもの多し、之を島廻りと稱す、

此外記すべき勝地古跡數限りなけれ共、あまり管々しければ略す、旅館としては前記紅葉谷の岩惣、白雲洞、濱町の龜福、大根屋等有名なり、宿料は一圓五十錢より五十錢位迄あり、

島居のみかすみを　もれて嚴島　海上仙山咫尺通　（安　美）

蕭萊何處五雲中　釣鼇直欲駕長風

此際秋濤看自壯

伊豫國

○道後溫泉

道後溫泉は我國に於ける三大溫泉の一にして、伊豫國道後にあり、此泉の由來は極めて古く、世に傳ふる處に依れば、「地神氏の世、大巳貴命、少彦名命と同心戮力して、國家を經營し、普ねく秋津洲を周歷す然るに少彦名命は仁慈深くして、若し蒼生の疾病に罹るものある時は藥草を採て之を服せしめ、或は鳥獸昆虫の災毒に觸るゝものには之を癒すに哭文の法を授く、又大巳貴命は專ら猛威を以て民を制す、斯て二神此地に到りし時大巳貴命悔耻て絶息しければ、少彦名命大に驚き直に溫泉を汲んで其體を浴せしむ、稍ありて蘇生す云々」人皇に降りては畏くも孝靈天皇を初め奉り七帝四后の御幸

ありし事は古記に詳なり、爾來幾度か地變に逢ひ湮滅せしと雖も直に又復舊し、綿々として現時に至れり、湯は「アルカリ」性にて、靈の湯、神の湯、養生湯、松の湯、藥湯の五に分ち共に梅毒、瘡毒、癩病、腺病、痔疾、子宮病及其他皮膚病一切に特効ありといふ、外に牛馬の浴場もあり、

此地は松山市を距る僅に十五町にして、道後鐵道は湯の町の南端に停車場を設け、松山一番町へは三等賃金三錢にして一日に三十回以上の往復あり、土地高燥にして山嶽を後に負ひ、西南は田圃を以て包まれ、綠樹蓊鬱の間にあり、旅館は大小凡百を以て數ふと聞けど其内最も大なるものは鮒屋、及び茶金とす、宿料は上等一圓五十錢より以下五六十錢迄あり、

溫泉場の西邊に一室ありて浴券を賣渡す、入湯者は此所にて自己の

欲する浴室を告げて金を出せば浴券に引替て渡すなり、而して入浴賃は湯によりて異なれ共、靈の湯にては上等三錢、中等一錢五厘、下等五厘にして、十二歳以下は半額の定めなり、

近傍名所あり、振鷺園は温泉の東北、町續きの山鼻にありて、眺望頗るよく、園中に舊松山藩久松家より建られたる温泉記の碑あり、

鴉溪は町の南方に在り、清流兩岸の間を過ぎ、春花秋葉の眺め盡せず、特に夏時納涼によし、

岡山は道後公園湯の町の南端にあり、古へ仲哀天皇及神功皇后温泉へ行幸の時、湯壺を据へさせたまひし行宮の地にして、其後聖德太子の碑文を建たまひて、伊佐爾波岡と名つけ玉ひし舊跡なり、今は公園となれり、

湯の神社は温泉場の南、岡上にあり、大巳貴命、少彦名命を祀れり、

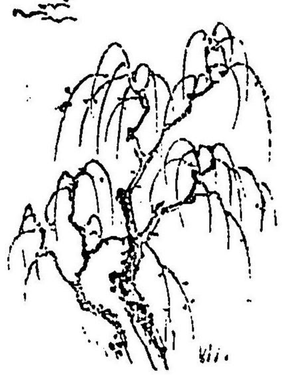
又出雲岡神社も同所にありて、素盞嗚命、稻田姫命を配せ祭る、二社とも延喜式内の古社なり、

其他伊佐爾波神社、寶嚴寺、大禪寺、義安寺、石手寺、湧ヶ谷、十六日櫻、車返櫻寺一訪せざる可らず、

名物としては湯染手拭、湯酒炙艾、五色素麺、竹器具等あり、

神さふる伊豫の湯桁の其上を
思へば遠き御幸なりけり　（萬　葉）

紅欄粉壁罩湯烟
個々高櫻叙影妍
和氣滿人秋不冷
溫柔鄉外有溫泉
（雲　來）



伊豫國　道後溫泉

豐前國

○耶馬溪

頼山陽一と度當溪に遊んで海内第一と絶叫せしより其名忽ちにして著しく、凡此溪を見さるもの又山水の美を説く可からずとまで言囃さる、

今同溪を探らんとせば、門司より小倉に赴き豐州鐵道の行橋驛にて轉乘の後、中津停車場にて下車すべし、(門司小倉間三等十一錢、小倉行橋間二十錢、行橋中津間二十五錢合せて五拾六錢)是より二里餘、鮎歸りといへる所より、山川の景致總て一變し、蜿蜒たる峻峯、山國の清瀨を挾みて長く、此間奇峭怪巖諸處に突起し、神工鬼斧の妙を盡せり、洵に天下の絶勝なり、佛阪、桶田、青の諸村を過

ぎ岐路して羅漢寺あり、當溪三勝の一にして、懸崖數百仞の上に峙立し、巖腹を抉つて中に五百羅漢を安ず、寺の左右前後は眼の及ふ限り巍峨たる嶂壁削立し、一望以て如何に當溪山水の雄大なるかを知らしむ、

當寺は曹洞宗の名刹にして、孝德天皇の御宇、大化元年、天竺の法道仙人なる者來り居をトせしことあり、爾來幾星霜、其間名僧知識の巡錫せる者多く、羅漢は出雲雲樹寺建須なるもの丶彫刻にかゝる、慶長二年細川忠興再建せしものとかや、

夫より再び本道に出で、屈智林に向ふ、大屋敷、柿阪、大島、一ッ戸、中摩、旭橋、曲淵、猿飛、毛谷を過ぎ彦山あり、凡耶馬溪の勝を探るの士十中の八九、青の隧道を潜り、羅漢寺山上より一望して以て全景を見得たるが如く又前進せずして、こゝに踵を回らせ共柿

阪より彦山迄の間風光決して以前に劣らず、否反つて遙に彼に勝るものあるなり、其内にも柿坂、一ッ戸、旭橋、猿飛の景に至りては如何に天工の苦心經營せしかを察するに餘りありて殆ど悽絶奇絶、我邦にも又此絶勝あるかを疑はしむ、

英彦山は溪中第一の高峰にして、頂上には英彦山社あり、瞰下せば耶馬の山川を一眸の裡に收むべし、然れ共阪路羊腸として又上り易からず、山陽が耶馬溪の記に、

彦山其尤大者、耶馬山脈水理、蓋自彦山發、故獨絶耳、余足跡幾半海内、弱冠東遊得妙義山、以爲無雙、今馬溪百里如妙義者、不知幾十峯、謂之海内第一或不誣也、

馬溪の風景を一々詳記せんは小冊子の能する處にあらず、又禿筆以て此奇景を叙するに忍びずこゝにはたゞ其順路の一端を記せる耳、但旅館といふ程ならねど、彦山迄の沿道にて一泊し得る處は、青村

に山國屋あり、又大島村にも一二宿泊せしむるものあり、

肥前國

○武雄溫泉

九州鐵道によれば武雄停車場にて下車し（門司より三等賃金廿九錢）、數丁にしてあり、四邊山嶽を以て圍繞され、空氣清澄四時の氣候人身に適し、眞に近國に於ける樂天地ともいふべし、湯は炭酸泉にして、無色清透なり、功驗は痼疾、腰痛、直腸病等にして又飲用しても、卓効ありといふ、

此湯は往古神功皇后三韓を征せられ還り玉ふや、此地に巡幸あり、適々疾病に罹らせられ、ふと白鷺の溪間に浴するを見て怪み玉ひ、自ら此靈泉を温め沐浴し玉へば、玉躰たちところに本復あらせられたり、と夫より普く世に知れ渡り、爾來年を追ひ、來浴者增加し、

目下旅宿を業とせるもの六十餘戸に及び頗る盛なり、殊に夏時は避暑を兼ね、赴く者多く、前記の旅館も又空室を留めずといふ、

浴室は八等に分ち、入浴賃特等五錢、上等三錢、中等二錢、下等を五厘より二厘迄とす、旅館の重なるものは角桝、東洋館、東京屋、抔にて、宿泊料は一圓五十錢、一圓又は七十五錢位にて其外中等以下は五十錢より三十錢位迄あり、

名物湯の花滋養菓子は風味佳なり、

此地より嬉野温泉へは三里十二丁にして腕車通ず、

肥後國

○阿蘇山

是は探勝會員東戸筱氏工科大學に修業中實地演習の爲め九州へ出張しけるとき物せる旅行日記の一節にして文體を改るの暇なしとのことなれば言文一致そのまゝを茲に掲げつ卷頭にある阿蘇山噴火口の寫眞は當時氏が非常の危險を冒して撮影せる者也

肥後國　阿蘇山

「根子に日が照りや杵島が曇る、阿蘇は廣い野じや野が七里……」

「イサギーヨカお天氣でございます、ソレバッテン阿蘇ん烟が左さに傾いとるけん明日どまあ降りまッしうバイ」

熊本から東のかた十三里高く雲間に聳えて斷へず烟を吐いて居るのが阿蘇山である、其烟が北に靡けば雨南に靡けば晴と云つて白川の流域のおかみさん達の晴雨計である

九州を人間の顔とすれば阿蘇はその鼻で而かもその鼻息が大ぶん荒いのである無論活火山としては日本一だ、學者の話に外輪山の直徑五六里もあるのが昔の噴火口でそれが一時休息して池となつて居たとのことで其池の一角を阿曾大明神が蹴破つたのが白川の溪となり今の阿蘇野となつた、右の大火口の中に再び噴火して今の所謂阿蘇が出來たのだ

抑も阿蘇山彙といへば外輪山を以て畫かれたる大圓孤の中にある數箇の山の群集で即ち根子嶽、高岳、中岳、杵島岳、烏帽子岳であつてこれを阿蘇の五嶽といつて居る、この五嶽の北に内牧の平原があり南に南郷の溪がある、昔の大噴火口即ち今の外輪山はこれだけを含むのでその内には五萬の住民がある、

外輪山の外側は勾配の緩慢な荒野で直徑二十里に亘る學者の眼からは、この大きなのが阿蘇山である、今噴火して居るのは中嶽の頂上である、

或物を見ない前に其物はどんな形をしてるたらうと想像する、その想像の當らない中で而かも最も實際に見て意に感するのが火山であるかも知れない、火山といへば、皆富士山見たやうな形で烟突から煙が出る如く烟を吹き出して居るものと思うらしい、或はそんなのが